福岡市西区

千里シビナ遺跡

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第88集

1982

福岡市教育委員会

序　　文

福岡市の西部周船寺周辺一帯も、近年急速に宅地化の傾向が進行しており、これらの開発による埋蔵文化財への対応が、要請されるようになってまいりました。

福岡市教育委員会では、やむを得ず保存できない埋蔵文化財に対して事前の発掘調査による記録保存に努めておるところであります。昭和54年度に西区千里で道路新設工事と宅地造成工事に伴う遺跡の発掘調査を実施し、その概要を刊行しておりますが、本書はその続編となるものです。

本書が市民のみなさんへの文化財への関心を高める一助となれば望外の喜びであります。

昭和57年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　西　津　茂　美

例　　言

1. 本書は福岡市西区千里字シビナ市道新設工事および個人住宅建設工事に伴い、令達事業と国庫補助事業として昭和54年度に実施した千里シビナ遺跡発掘調査の報告書である。
2. 千里シビナ遺跡の発掘調査の概要については、昭和55年に「千里シビナ遺跡発掘調査概報」を刊行しており、本書はその続編をなすものであり、出土遺物の報告に重点を置いた。
3. 本文の執筆は、Ⅰを塩屋勝利、Ⅱを田中寿夫、Ⅲを渡辺和子、Ⅳは共同して行なった。
4. 本書の作成に当っては、遺物写真撮影、製図は力武卓治、二宮忠司の協力を得た。
5. 本書の編集は塩屋、田中、渡辺が行ない、楢崎多佳子、下尾美成子、花畑照子、溝口博子の協力を得た。

本　文　目　次

Ⅰ．はじめに …… 1
　1．　調査の概要 …… 1
　2．　遺構について …… 1
Ⅱ．出土土器 …… 3
Ⅲ．出土石器 ……10
Ⅳ．ま と め ……24

挿　図　目　次

Fig．1　千里シビナ遺跡周辺主要遺跡分布図（縮尺1/75,000）……Ⅳ
Fig．2　２号溝（道路部）実測図（縮尺1/60）…… 2
Fig．3　千里シビナ遺跡遺構配置図（縮尺1/160）……折り込み
Fig．4　包含層，ピット出土土器実測図（縮尺1/3）…… 5
Fig．5　住居址出土土器実測図（縮尺1/3）…… 6
Fig．6　１号溝，２号溝出土土器実測図（縮尺1/3）…… 7
Fig．7　２号溝出土土器実測図（縮尺1/3）…… 8
Fig．8　２号溝，３号溝出土土器実測図（縮尺1/3）…… 9
Fig．9　包含層出土石器実測図Ⅰ（縮尺3/5）……14
Fig．10　包含層出土石器実測図Ⅱ（縮尺3/5）……15
Fig．11　包含層出土石器実測図Ⅲ（縮尺3/5）……16
Fig．12　包含層出土石器実測図Ⅳ（縮尺3/5）……17
Fig．13　包含層出土石器実測図Ⅴ（縮尺3/5）……18
Fig．14　遺構内出土石器実測図Ⅵ（縮尺3/5）……19
Fig．15　包含層出土石器実測図Ⅶ（縮尺1/4）……20
Fig．16　包含層出土石器実測図Ⅷ（縮尺2/3・1/4）……21

図　版　目　次

PL.1　包含層，ピット出土土器（縮尺1/3）
PL.2　住居址，1号溝，2号溝出土土器（縮尺1/3）
PL.3　2号溝出土土器（縮尺1/3）
PL.4　2号溝，3号溝出土土器（縮尺1/3）
PL.5　石鏃，つまみ形石器，サイド・ブレイド（縮尺3/5）
PL.6　刃器，石核（縮尺3/5）
PL.7　剥片石器（サヌカイト），石錐，他（縮尺3/5）
PL.8　磨製石斧，打製石斧，他（縮尺1/3）

表　目　次

Tab.1　剥片石器計測表……22

Tab.2　各遺構出土土器分類別一覧表……24

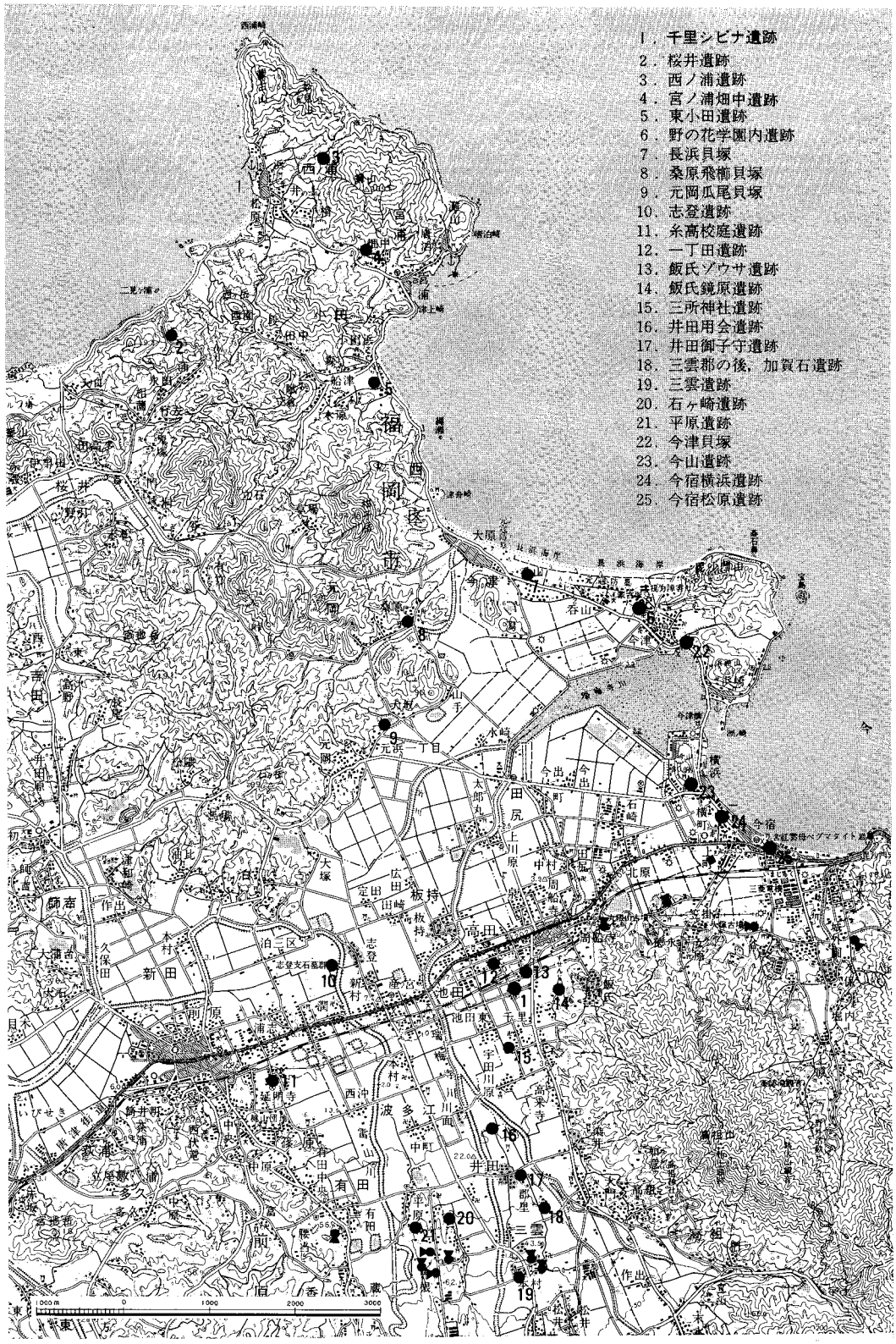


Fig.1　千里シビナ遺跡周辺主要遺跡分布図（縮尺 1/75,000）

Ⅰ．はじめに

1．調査の概要

本遺跡発掘調査の経緯は、昭和53年８月に有限会社松丸不動産より、福岡市西区大字千里字シビナ453番地１の1573m²に対する開発計画事前審査願が提出され、さらに当該地東側隣接地に南北に走る市道建設計画が、福岡市西区役所今宿出張所土木農林課から提出され、同年９月に試掘調査の結果、縄文時代後晩期、弥生時代前期の埋蔵文化財包蔵地である事を確認した事による。このため、各々の原因者との協議の上、昭和54年度の国庫補助事業と、市令達事業とを合わせ、緊急発掘調査を実施するところとなったものである。調査は昭和54年10月15日から同年12月７日迄実施した。発掘調査の組織は次のとおりである。

調査主体　　福岡市教育委員会

調査担当　　文化部文化課埋蔵文化財第二係

発掘担当　　塩屋勝利　田中寿夫　渡辺和子（調査補助員）

本遺跡発掘調査の概要については、昭和54年度の「千里シビナ遺跡発掘調査概報（福岡市埋蔵文化財発掘調査報告書第60集）」に報告しており、発掘調査の経過、位置と環境、出土遺構などは同報告書に記載しているが、以下、簡単に遺構の概要を記述する。

2．遺構について(Fig.2～Fig.3)

発掘区の層序は、耕作土、床土、暗褐色粘質土（遺物包含層）、遺構掘り込み土層の黄灰色粘質土層、南側では部分的に青灰色粘質土層や暗灰褐色砂質土層が堆積する。遺構の検出できる部分は北側にかたより、南側には遺構掘り込みの層が認められず、平坦な水田を造営するために後世この一帯は削平された事が明らかである。地表から70～110cmで基盤礫層に達し、南側のＥ－16区付近では深く、Ｅ－13区付近で浅くなりＥ－12区から徐々に深くなり、Ｅ－11区付近でさらに下がっている。市道建設予定地のＨ－１区～Ｈ－９区の５ｍ×48ｍの範囲は、基盤礫層は南東部から北西部に向けて僅かに傾斜をみせ、Ｇ－10区までは地表下30～40cmと浅く、Ｇ－９区で25～30cmの段差ができ、北側へ続いている。遺物包含層も凹凸をみせながら北側へ続き、北側部分は基盤礫層より10～15cm上に堆積している。

遺構は円形竪穴住居址１軒、溝３条、埋甕１基、ピット群なども検出したが、市道建設区域

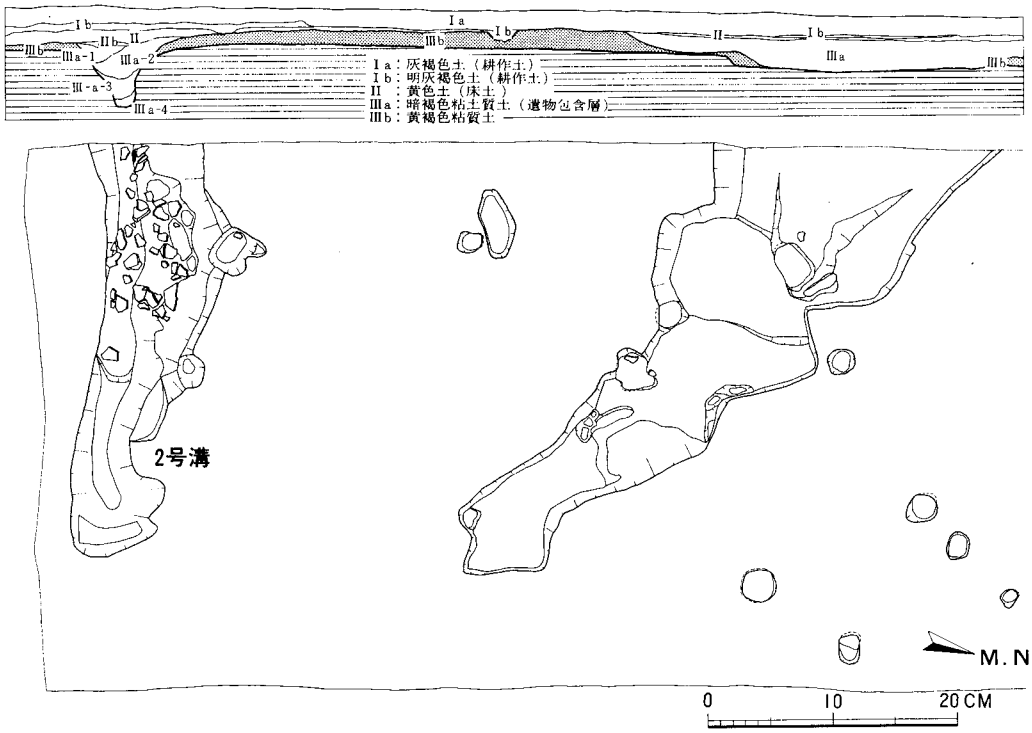
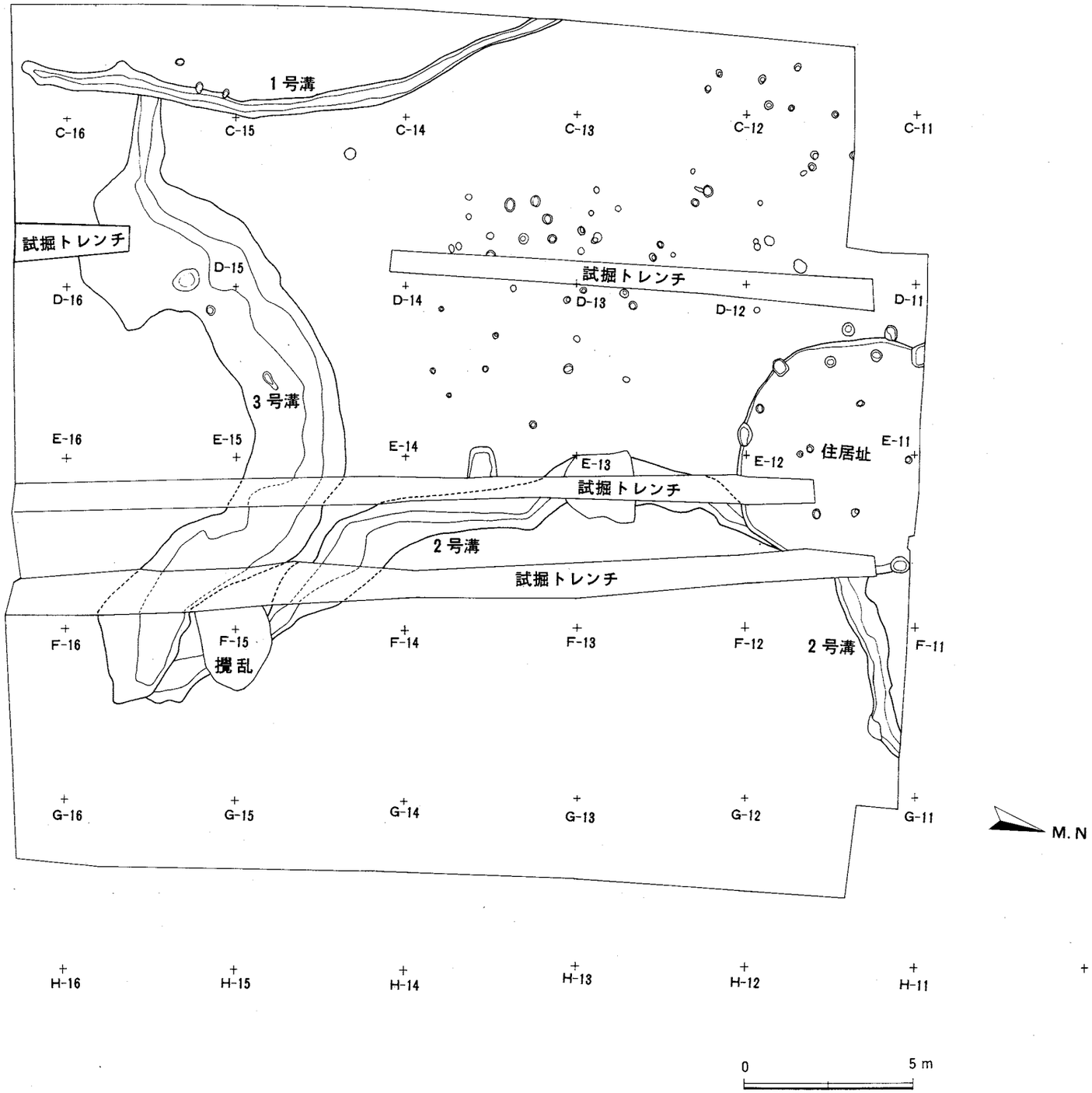


Fig.2. 2号溝（道路部）実測図（縮尺1/60）

のH－1区～H－9区にかけては遺物包含層のみで、遺構は検出できない。

住居址はD－11区～E－11区にかけて検出したが、北側5分の1の部分は調査区を外れる。直径7.0m前後の内形プランを呈する住居址で、後世の削平のため壁は床面から5～8cmの高さしか残っていない。遺物の出土状況は、床面密着のものはなく、すべて埋土から出土しており、年代決定の資料とはなり得ない。1号溝はB－15区で消滅するが、北西部はさらに調査区外へのびている。上面幅30～40cm、底幅20～30cm、深さ15cm前後で断面は逆台形を呈する。遺物はB－14～B－15区間に多く、底面に密着して板付Ⅱ式の甕口縁部片、壺底部が出土し、埋土には縄文時代後期の土器片が含まれる。2号溝は調査区の中央部にあり、E－11区では住居址に切られ、北東側はH－10区、南側はF－15区で消滅する。上面幅0.7～1.6m、底幅0.3～1.1m、深さ24～15cmで断面U字形を呈する。F－11区では夜臼式土器を出土する土坑に切られる。遺物は最下層の砂層に少量の縄文土器、その上の粘土層に多量の縄文土器が含まれる。3号溝はC－15～F－15区にかけて弧状をなして認められる。溝の堆積土は、最上面には遺物を含まない黄褐色粘質土、中位には暗灰褐色微砂質土、下位には暗褐色細砂、最下層は縄文後期後半の遺物を含む砂層となる。遺物の出土は、壁の落ちぎわと中・下層の境付近に多く集中する。



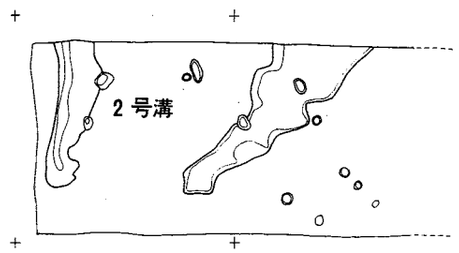


Fig.3　千里シビナ遺跡遺構配置図（縮尺 1/160）

II．出土土器(Fig.4～8，PL.1～4，Tab.2)

調査により出土した土器は、縄文時代後期後半の時期のものが主体となり、縄文時代晩期末から弥生時代前期末にかけてのものが小量出土している。包含層である第Ⅲａ層をはじめとして２号・３号溝・住居址からかなりの量で出土しているが、ほとんどが小片であり、ローリングを受けているため図示しうるものはわずかである。各遺構毎の型式別にみた出土状況はTab.2に示している。なお土器の説明にあたっては出土した総ての土器について形態分類を行い、分類に従って概括的に記述する。挿図は遺構別にまとめた。

縄文土器

鉢形土器（15，18，19，37，53～56，58，59，65，67）

１－ａ類　口縁部は平縁で内湾気味の頸部からやや内向きに口縁が立ち上がり、胴部が球形となる鉢形土器である。文様帯は口縁部と胴部上半にある。文様には*x*字文が平行沈線文と組み合わせて施されるもの（18・55・56）と波状文が平行沈線間に施されるもの（58・59）がある。図示しなかったが、平行沈線文のみを胴部上半に施すものもある。器面はヘラによる磨研調整。胎土はきめ粗く、ややもろい。色調は暗灰褐色～暗褐色。１－b 類　口縁部は平縁で、外湾気味の頸部から内向きに屈曲し立ち上がり、胴部は屈折し弱い肩部を形成するものである（65）。口縁部には*x*字文、アナダラ肋背による貝殻擬似縄文が施される。２－ａ類　口縁部は波状口縁で、外湾気味の頸部から内向きに屈曲して立ち上がるもので、胴部はやや肩の張った器形になると思われる。19は波状口縁頂部破片で平行沈線のみの施文で、67には細線羽状文が併用されている。２－b 類　器形はａ類とほぼ同様であるが口縁部に沈線文がなく、粘土突起が口縁頂部に「ノ」の字形に貼付されるものである（15）。頸部下端に一本の沈線が巡る。２－c 類　器形はａ類とほぼ同様で、無文のものである（53・54）。２類は１類に比べ、胎土焼成ともに良好で堅緻。器面調整もより丁寧な磨研が施されている。３類　外反する口縁をもつ小形の鉢形土器である（37）。胎土中に砂粒とともに植物を混入しており器面には小気孔が多数みられる。胴部内面は約1.5cm 幅の木口による削りが斜位に施される。

浅鉢形土器（５～７，16，17，57，60～63，66）

１－ａ類　胴部最大径の屈折部から口縁が内傾して立ち上がり、口縁部と屈折部間に施文するもので、*x*字文が施されるもの（６）、*x*字文の空隙に巻貝頂部で、縦位の刺突列点文を付加したもの（５・66）、三本の平行沈線に細線羽状文を組み合せたもの（17）がある。１－b 類　胴部最大径の部位から口縁部が外反しつつ立ち上るものでａ類と同様口縁端部と屈折部間が文様帯となる。文様は平行沈線文と斜行沈線文が施文されるもの（57）、ヘラ磨研による稜

線の不明確な凹線文のもの（16・62）、二本の平行沈線のもの（61）がある。２類　胴部最大径の部位から屈折して外反する頸部を有し、口縁部がやや外向きに立ち上がる器形で、頸部が大きく内湾するもの（63）、大きく外反するもの（７）がある。63の口縁部にはヘラ磨研による凹線文が、７の頸部下端には二本の沈線文がそれぞれ巡る。１～２類はいずれもヘラによる磨研調整が顕著。暗褐色～黒褐色の色調を呈す。３類60は外湾する胴部から口縁部が屈折し外反するもので、屈曲部は明確な稜線を描く。内外面ともにヘラ磨研。

深鉢形土器　（１～４，11～14，31，35，38～52，64，68～73）

１－ａ類　口縁部から直接胴部へと続き、口縁端部がナデにより平坦となるものである。内外面とも条痕が施されるもの（38・39・45）、内面はナデのもの（41）がある。Ｉ－b 類　器形はａ類と同様だが胎土焼成ともａ類と比べ良好で、内外面ともナデ調整のもの（12・13・46）。２類　口縁部が外反し、胴部が若干外湾気味のもので内外面ともに条痕がみられるものである（１・２・３・11・44・47・64）。３－ａ類　わずかに内湾する頸部を有し頸部からそのまま外反する口縁部へと続くもので、内外面ともに条痕が施されるものである（４・40）。３－b 類　器形はａ類と同様で、内外面ともナデ調整によるもの（14）である。以上の１－ａ・２・３－ａ類はいわゆる粗製深鉢形土器で、胎土中に砂粒、植物を混入し焼成しており、非常にもろく、焼成不良の土器である。色調はおおむね暗灰褐色～黒褐色で、47には炭化物が付着。４類　内湾する頸部から直接口縁へと続くもので、肩部が形成されるものである。内外面ともに条痕がみられるもの（68～70）、内面にはヘラによるナデ調整が施されるもの（42・43）がある。胎土、焼成ともに良好。黒褐色～黒色を呈し比較的堅緻である。31・35・48～50・51・52・71～73は、粗製深鉢形土器の底部で、植物種子圧痕を多数残す。

甕形土器　８は口縁部が若干内傾し、胴部がやや外湾する器形となるもので、口縁部のやや下部に刻目突帯を貼付。９・10は、胴部上半で「く」の字に内傾する器形で、屈曲部と口縁部に刻目突帯を貼付するものである。いずれも外面上半部は斜位の、下半部は縦位の貝殻条痕調整。

壺形土器　20は小型の丸底壺底部である。26は大型壺で頸部に上から下へ向う４本の斜行沈線が、肩部には二本の沈線が巡る。いずれも暗灰褐色を呈しヘラによる磨研調整が施される。

弥生土器　（22～25，27～29，32～34，36）

板付Ｉ式　24は甕形土器底部片で木葉圧痕が残る。25は大型壺の肩部破片で、肩部に一本の沈線が巡る。器面は丹塗り。27は同じく底部片である。32～34は高杯脚部破片である。脚部と杯部の境に断面三角形の突帯が貼付されている。いずれも赤褐色を呈す。板付II式　22・23・28は甕形土器口縁部破片である。22・23は口縁端部に、28は口縁下の三角突帯上に刻目が施されている。29・30・36 は 甕形土器底部片である。29の外面はハケ目調整で、30・36は内外面ともナデ仕上げによる。色調はおおむね黄褐色～明褐色を呈す。

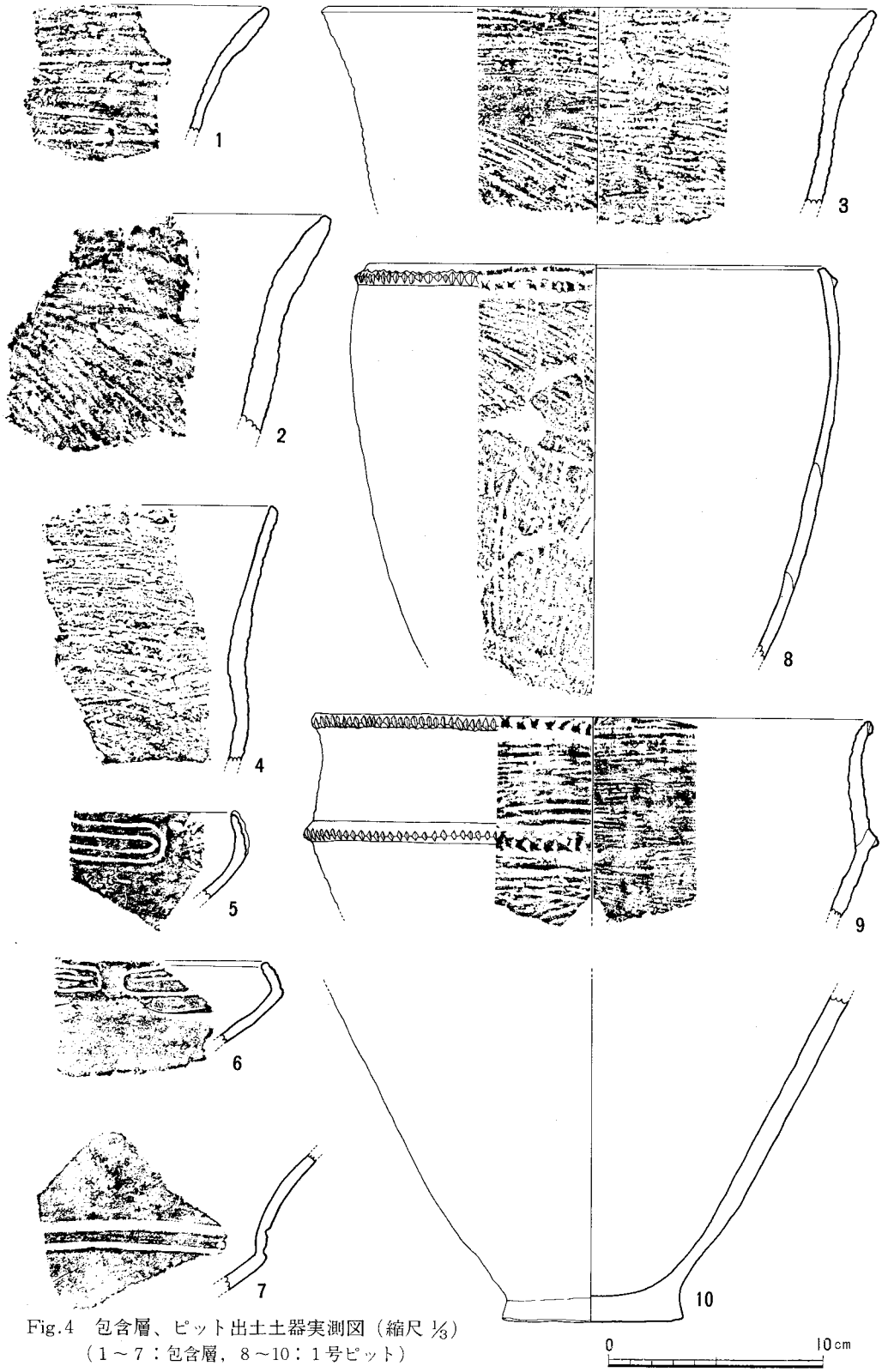


Fig.4　包含層、ピット出土土器実測図（縮尺 ⅓）
（1～7：包含層，8～10：1号ピット）

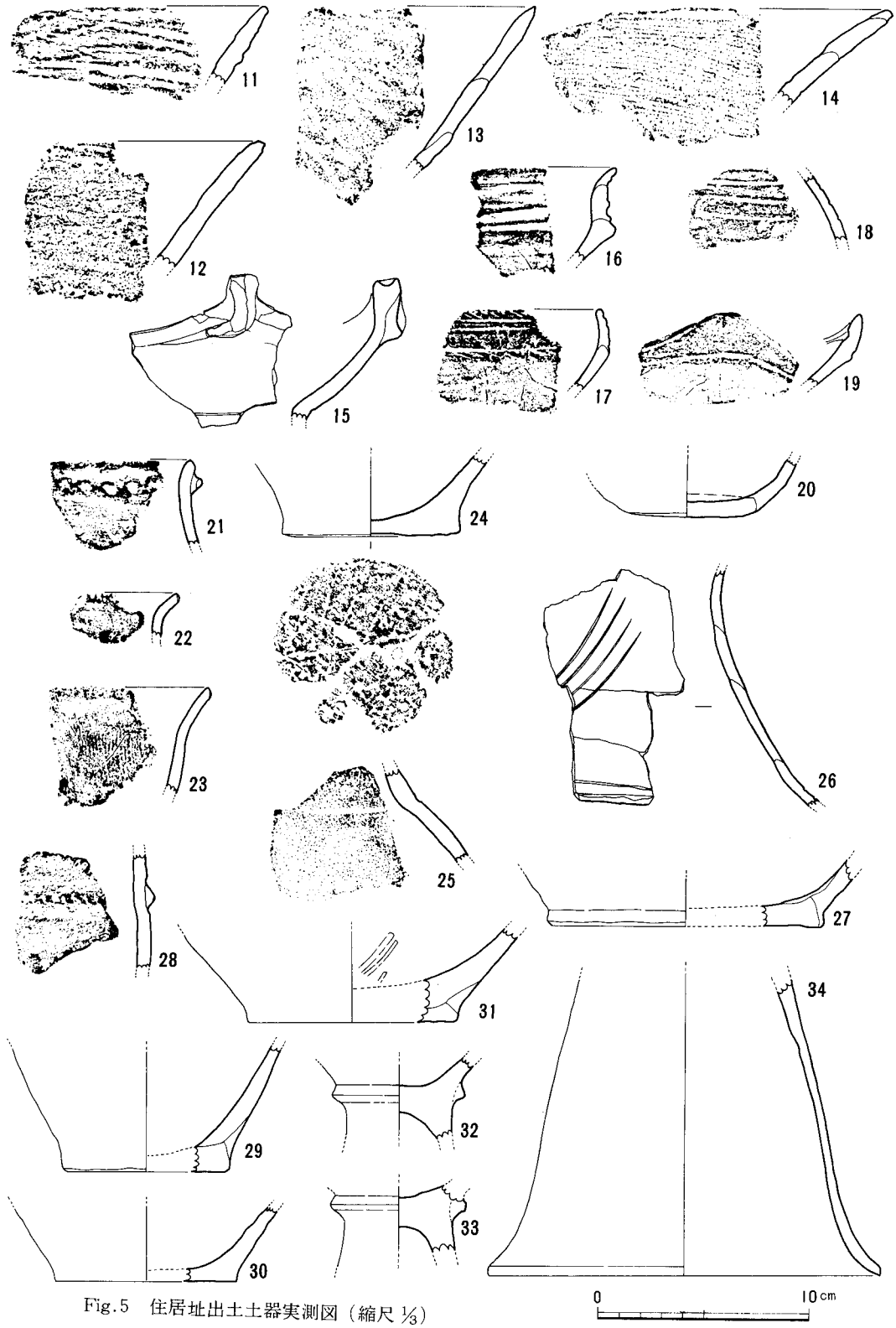


Fig.5　住居址出土土器実測図（縮尺 1/3）

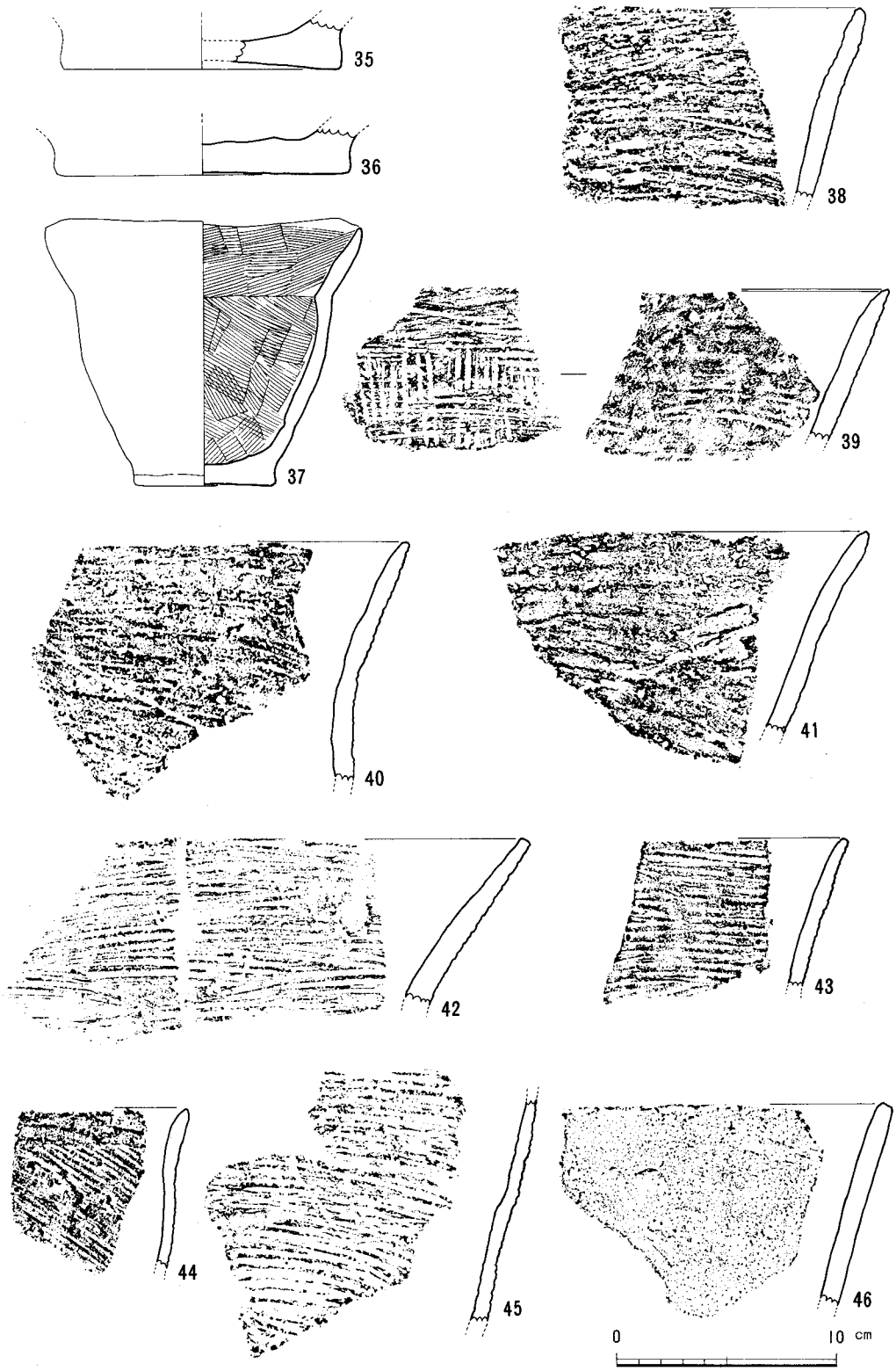


Fig.6　1号溝、2号溝出土土器実測図（縮尺⅓）　(35～36：1号溝，37～46：2号溝)

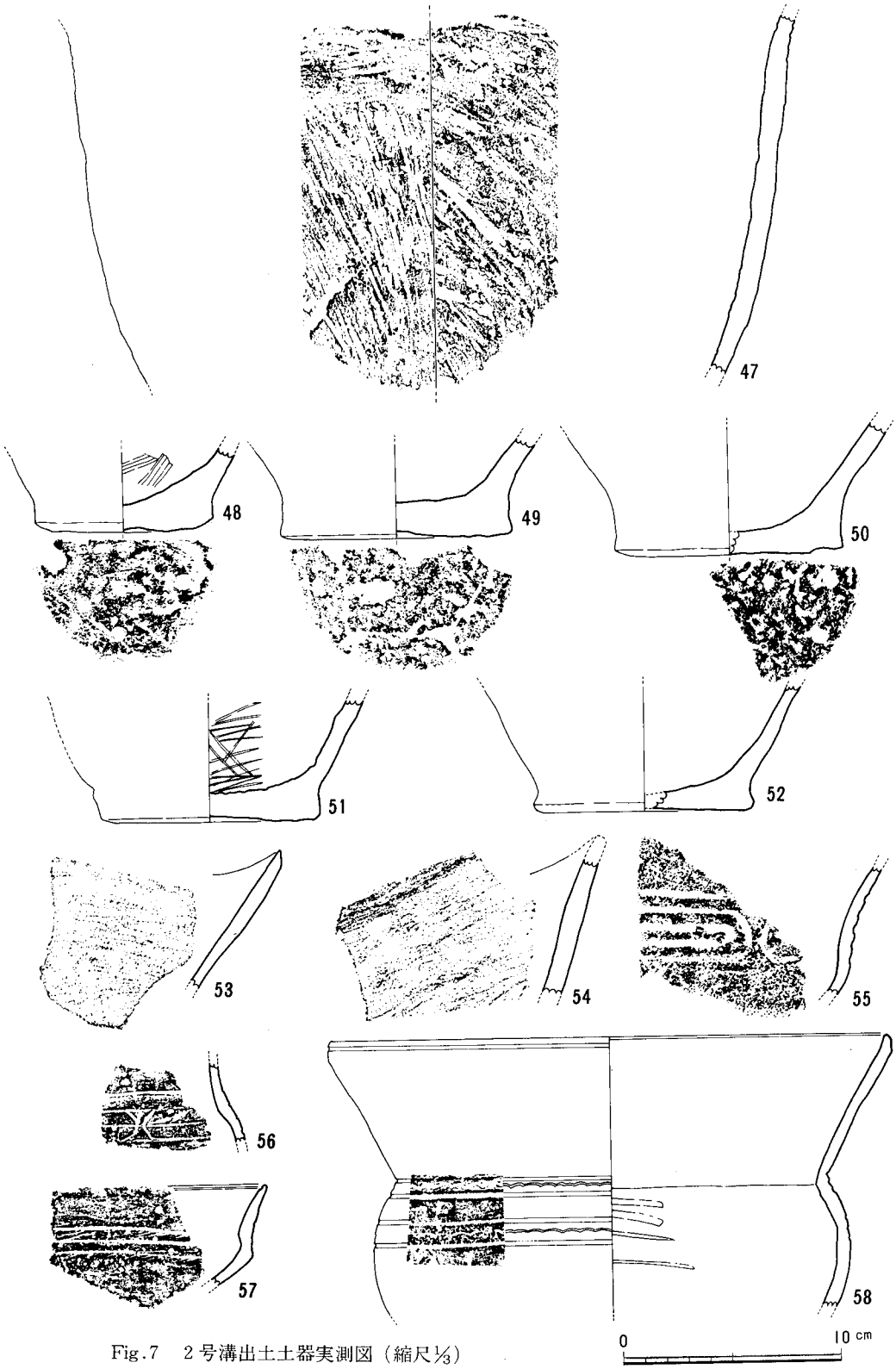


Fig.7　2号溝出土土器実測図（縮尺1/3）

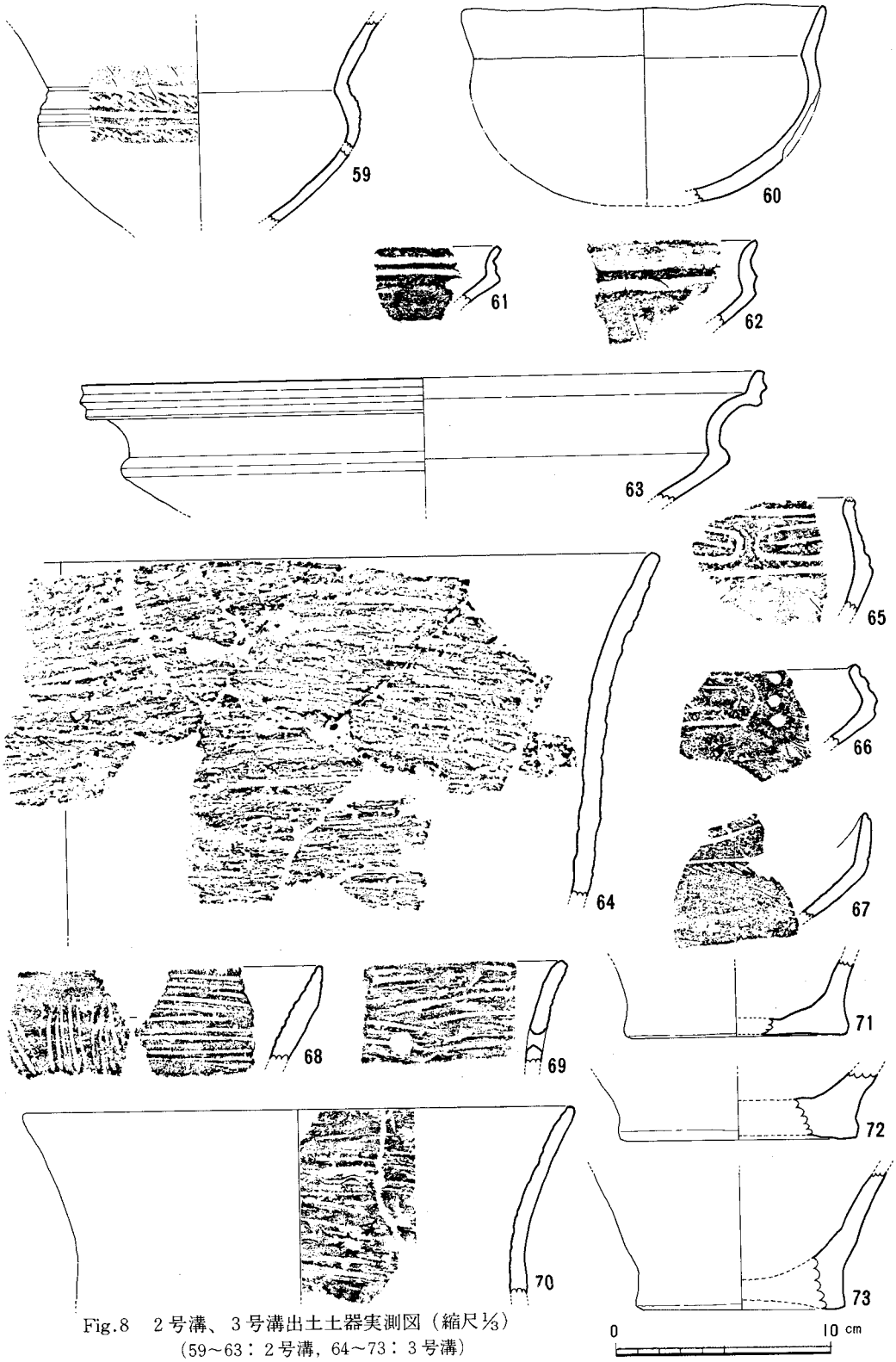


Fig.8　2号溝、3号溝出土土器実測図（縮尺⅓）
（59～63：2号溝，64～73：3号溝）

Ⅲ. 出　土　石　器

検出された石器は遺構内からは極く僅かで、その大半は包含層より出土したものである。それらは多種多様の器種が認められ時期も縄文時代から弥生時代におよぶ。しかもその半数は縄文後期の土器に共伴して出土した。表採あるいは包含層の上部より出土した石器類の中にもあきらかに縄文後期の所産と考えられるのも少くない。以下包含層・遺構内の石器について述べる。（紙数の都合上、包含層・遺構内を統括して述べる事をお断りしておきたい。）

石　鏃　（Fig.9・1～15, Fig.14・128～132, PL.5）

出土した石鏃は破損品を含めて20点検出された。そのうちの4点がサヌカイト製で残りは総て黒曜石製である。素材となった剥片への加工の差異により三類に分類できる。Ⅰ類普遍的に検出されるもので、二次加工が素材の全面および横断面は凸レンズ状を呈するもの。1～4がこれに含まれる。大きさには差異が認められるが、形態的には二等辺三角形を呈する。1・2は全周に細かな剥離が施されている。3はサヌカイト製の石鏃で加工は大まかな剥離である。4はパティナの進んだもので加工はやはり大まかである。他にくらべやや小形。　Ⅱ類二次加工が全面に施されず素材となった剥片の主要剥離面あるいは大剥離面の一部が残されていて広義の剥片鏃に属するもので5～10・130・132が該当する。5～7・9・10・130・132は素材となった剥片の打面部を基部として抉入部あるいは側辺部または先端部に二次加工を施したものですべて主要剥離面側が残されている。9の側辺部の二次加工は大まかな剥離がなされ角ばっていて一見すると鋸歯鏃的である。さらに大剥離面には左右の横位からの剥離が残り、素材となった剥片の用いられ方は特徴的である。Ⅲ類には11～15・131が属する。大剥離面に1～2本の稜線を有し、主要剥離面側の脚部もしくは先端部にのみ加工が施されたもので、縄文中期から後期に顕著な出土をみせる、いわゆる剥片鏃と呼称されるものである。大剥離面の剥離方向は一定方向もしくは上・下二方向をもつものがあり、素材となった剥片の剥離技法を特徴づける。14は基部にのみ加工が施され、素材となった剥片の先端部が利用された事が判別される資料である。10・15・132は他の石鏃にくらべて大形である。129は1号溝、128・130～132は2号溝出土。

石　錐　（Fig.9・16～18, Fig.14・133）

16は石錐の刃部部分のみで元の形状は不明である。表裏ともに細かな二次加工が施されている。17・18・133は素材に剥片が利用されている。17は表裏に細かな二次加工が加えられ、一見するとサイド・ブレイドと見まちがいそうなものであるが、先端がすぼまる事から一応ドリル状石器として考えた。18の先端部は僅かに欠損しているが、側辺部の加工にくらべ先端部は急

にすぼまり細かな剥離が集中した薄手のものである。133は一応、石錐として扱ったが、いわゆる石錐の形態とは異なる。大剥離面に稜を残し、素材となった剥片の打面部側に加工が集中しているが、素材のバルバスカーと打面部を残す。僅かに残る打面部が石錐の刃部を彷彿させ、形態的に石錐のバリエーションとして、一応同様に扱った。133は２号溝出土。

尖頭器　(Fig.9・19～23)

４点出土したが、19・22が黒曜石、他はサヌカイト質安山岩である。19・20は平基式石鏃とも考えられるが全体的な形態から尖頭器とした。19～22までは素材に縦長剥片が用いられている。21の先端は欠損しているが、側辺部は両面から二次加工が施されている。22は大剥離面を大まかな二次加工で調整し、主要剥離面は先端部と基部にのみ加工を施して素材となった剥離面を中心部に大きく残している。23も先端部は失われている。パティナの進んだもので稜もローリングのためか丸くなっている。二次加工は表裏ともに大まかである。

つまみ形石器　(Fig.9・24～29, Fig.14・134～135)

図示した中で、いわゆる〝つまみ形石器〟は５点で、他は同種のバリエーションとして把握できるか否か問題となるが一応同様に扱った。25・26・28は素材の剥片の末端側が利用されたものである。25・26の抉入部は片面からのみの二次加工で調整され、明確な抉りはもたない。24・27・29・135は素材の剥片の打面側が用いられたもので打面や主要剥離面にバルバスカーを残している。27・135の様に抉りのつけ方が一方に深いものもある。29は折断の際の失敗からか剥片部も抉入部とともに折れている。24～29・135の側辺部は細かな二次加工や使用痕的剥離も認められる。134は厚手の素材が使用されていて、いわゆる〝つまみ形石器〟とは異なる可能性もあるが先端部も失われているため判別できなかった。しかし抉入部と考えられる部分の調整等から一応同様の器種として扱った。134は２号溝、135は１号溝よりの出土である。

楔形石器・彫器　(Fig.9・30～48, Fig.14・136～138)

楔形石器とした30～45, 136～138は形態的な特徴をもつ。黒曜石を素材にしその両面に特殊な剥離を施している。これらの大半の長軸の一端には細長い樋状剥離面が観察され彫器との類似、また長軸に並行する上下両端からの加工などは小形の石核を彷彿させる。30～34・136・137はほぼ同様の大きさのもので両面に上下二方向からの剥離をもち、上下両端に強い力の加わった事が観察できるもので、あたかも残核を想定させる。35～45は形態的にほぼ長方形を呈し、縦断面は凸状を呈する。上端あるいは下端に樋状剥離が認められ、樋状剥離の反対側には打撃によるつぶれた痕が観察できる。35・36・38などは彫器と考えられる剥離が観察できるが、前述のように上下の圧力と剥離から楔形石器として扱った。46～48は彫器で黒曜石を石材とする。46は大剥離面は中位の剥離で二次加工が加えられ、長軸の一端に上位からの樋状剥離が認められ刃部を形成している。47も表裏ともに二次加工が施され、上下二方向からの樋状剥離離で彫刻

刀面を作り出している。48の彫刻刀面は上下二方向から加工がなされ階段状をなしている。

サイド・ブレイド　(Fig.10・49～80, Fig.14・139～147)

黒曜石製の剥片石器の中で、整った縦長剥片を素材に剥片の打面・末端あるいは側辺部に加工を施し、長方形ないしは方形を呈する石器をサイド・ブレイドとして一括した。縦長剥片の一端あるいは両端を折断による方法でカットを行なったものと小さな調整剥離によって整形されたものとに大別できる。49は素材の両面に二次加工を施し半月形に整えた比較的大形のものである。51は49と同様両面に加工を施したものだがやや小形。50・52は片面あるいは素材の一部分にのみ加工を施したものである。54～57・59～80・140～143・145～147は素材の縦長剥片の一端あるいは両端を折断したもの、さらには小さな調整剥離を短辺部にのみ加え側辺部は素材の鋭い側辺を刃部としているものがある。これらは加工部の差異により細分する必要があるが、今回はとどめておきたい。139・140・142～145・147は2号溝、138・141は1号溝、146は土坑より出土。

刃　器　(Fig.11・81～101, Fig.14・149～153, 155)

黒曜石製の比較的大形の縦長剥片を素材にして、その側辺部に沿って二次加工が施されたり、使用痕と思われる細剥離が観察されるものを刃器とした。81～83は比較的形の整った剥片を素材にしたもので、先端部に二次加工がなされていて、尖頭状に整形されている。81・82は素材となった剥片の打面・バルブ・バルバスカー等が残っている。83はやや小形の縦長剥片を素材にし、基部となった打面部側も加工によってバルバスカー等を取りのぞいている。84・85・147は側辺部に二次加工・使用痕が認められる。86～100・152は素材の形状をそのまま保っているものの側辺部には著しい使用痕的剥離が認められる。92・95の様に先端が細くなるのや、93の様に先端部がヒンヂクラクチャーになるのも見受けられる。93・95・152などは剥離された石核の大きさが窺える資料である。これらも細分類できるが量的に少いので今回はとどめる。149～153・155はすべて2号溝出土である。

剥　片　(Fig.12・102～108, Fig.14・154～157)

刃器とした石器にくらべ全体的に小さく寸づまりの横に広い黒曜石の剥片を一括した。これらの中には側辺部に使用痕の認められるものもある。剥離方向も刃器に比べると一定してなく二～三方向からである。154～157は2号溝出土。

石　核　(Fig.12・109～115)

石核の出土は多く20点を数える。しかしいずれも不定形で刃器等の定形的な剥片を剥取した石核とは考えられないものばかりである。110は残核を利用した掻器で大剥離を小さな剥離によって刃部形成している。109・112・113は一部に自然面を残し、剥片剥取も上・下・横位からと一定していなく、剥取されたと考えられる剥片は小さくいずれも不定形である。

サヌカイト製剥片石器　(Fig.13・116～127)

ここではサヌカイト質の剥片の側辺部に使用によるためと考えられる剥離が観察できる石器あるいは削器・掻器を含めて一括した。116・122・124～127は大形の縦長剥片あるいは不定形な剥片の一辺または両辺に二次加工を施したもので削器と考えられる。117・118は同様な型で先端部が折断や加工で調整されている。いずれの剥片の側辺部には使用痕が認められる。しかも素材はそのまま生かされていて刃器としての用途が考えさせられるものである。

石　斧　（打製，磨製石斧）　（Fig.15・158～174）

石斧は打製と磨製に大別できるが、ここでは磨製石斧は僅か3点の出土である。図示した159・161の他の一点は、かろうじて磨製石斧片とわかる程の細片である。159は使用途中でくり返し研磨が行なわれている。174は安山岩製で、周辺部を大まかに加工し浅いノッチ状の抉りをつけたものである。他はいわゆる扁平打製石斧と呼ばれているものであるが、従来の扁平打製石斧にくらべ、やや薄手のものが多い。これは使用対象の違いによるものか否か今後の課題である。

磨製石器　（Fig.16・175～184）

175は一片が欠損している十字形石器で抉り部分は削り、両面は研磨で仕上げられている。176・177は硬質砂岩製の磨製石器で、接合はしないがこの2点が接合した状態が本来の形状かと思われる。同様なものは福岡市西区四箇遺跡に出土している。178は石錐。安山岩の両辺を粗く打ちかいたものである。

出土石器について

縄文後期の溝と包含層の一部が検出され、石器類も後期特有と云われる剥片石器類が多く出土した。同様な立地を示す福岡市西区四箇遺跡の出土石器と組成が類似し注目される。しかし千里シビナ遺跡では、扁平打製石器の出土の割合が四箇遺跡に比べ高く、いわゆる縄文後期における九州の台地上に立地する遺跡との対照など興味がもたれる。さらには扁平打製石斧が従来検出されているものよりやや薄手であると云うことも、打製石斧の使用目的あるいは対象物の違いを示唆するものとして興味深いものである。

刃器等のいわゆる形の整った縦長剥片が出土するにもかかわらず、その石核と考えられる石器の一点の出土を見ないのも興味がもたれる。剥片石器の中での楔形石器の出土量も多い。この楔形石器は形態的な特徴および両端に認められる使用痕から〝石製の楔〟を考えており、石以外の素材を用いた道具類（木器等）が使用された可能性を十分に予想させる。

サイド・ブレイドは器種の認定において常に問題視される石器であるが、極めて興味深い資料が検出された。**Fig.10・63**は素材の側辺部は生かされ末端部が折断されたものであるが、バルバスカーと大剥離面の稜を故意に擦り落としているのは注目される。シャフト装着の際に高くなる部分（ここではバルバスカーと稜）を擦ったものと考えられ、一点の出土で即断ではあるかも知れないが折断ブレイドの使用方法の一端を窺えるものとして挙げておきたい。

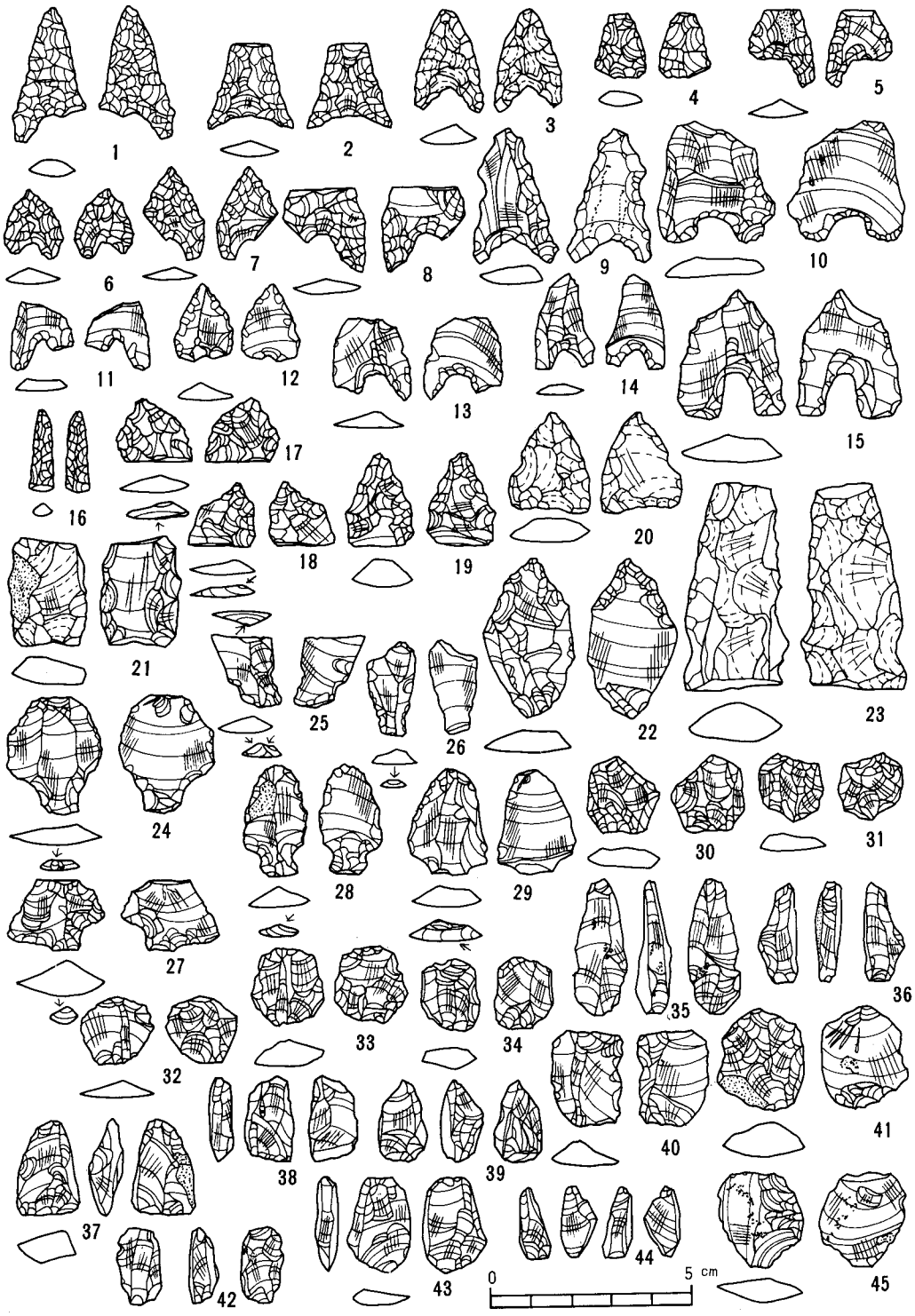


Fig.9　包含層出土石器実測図Ⅰ（縮尺3/5）

Fig.10　包含層出土石器実測図II（縮尺3/5）

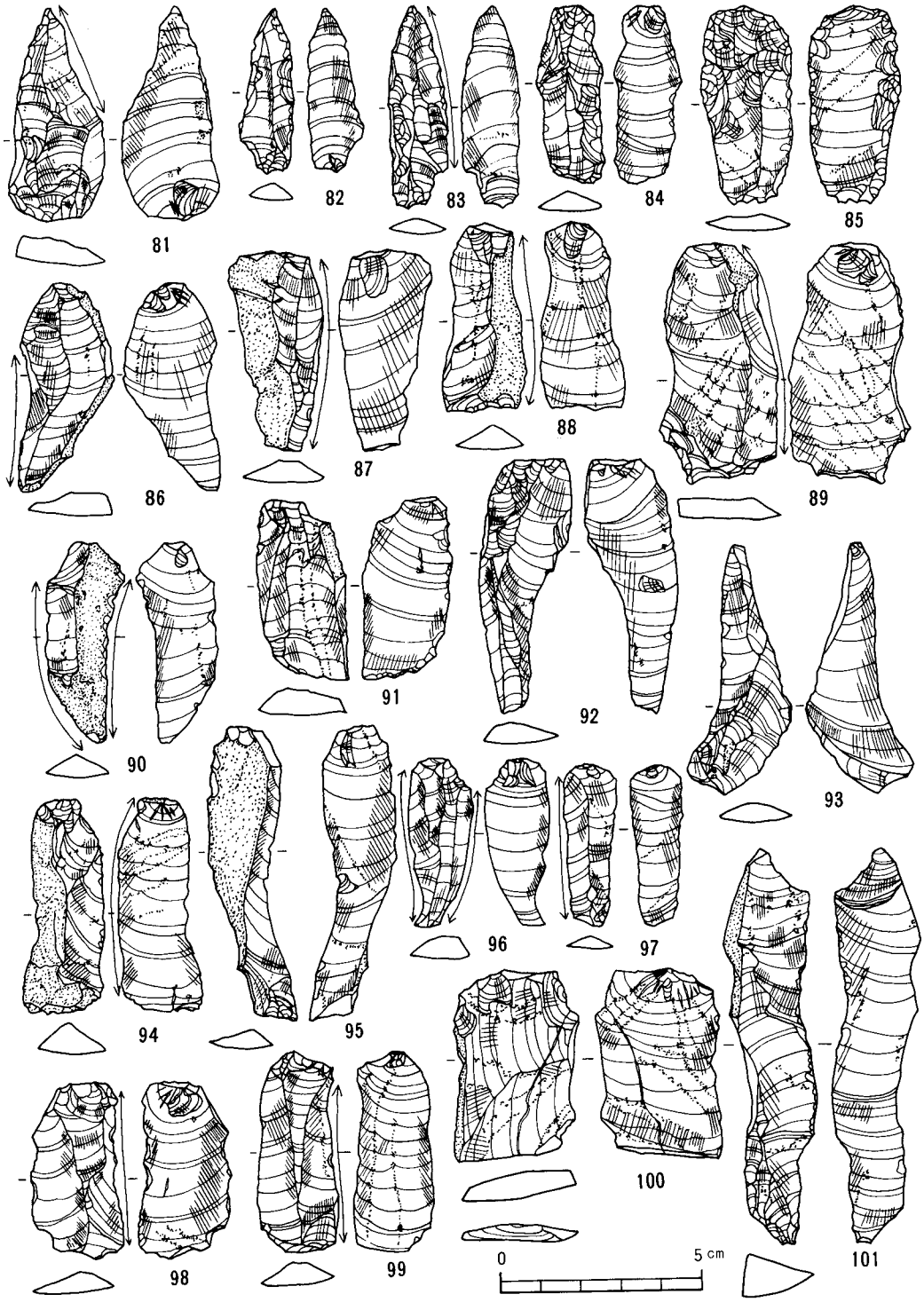


Fig.11　包含層出土石器実測図Ⅲ（縮尺3/5）

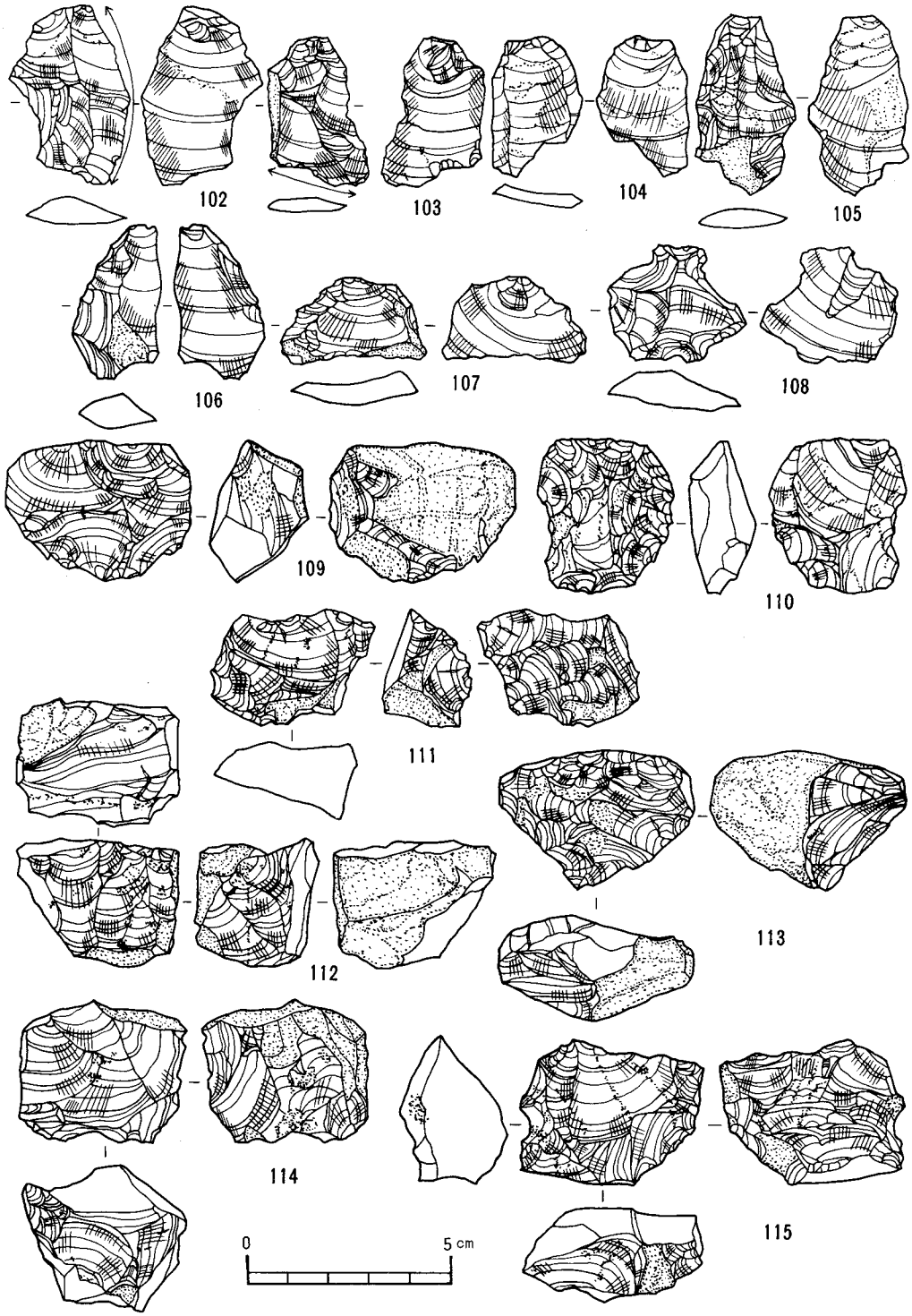


Fig.12　包含層出土石器実測図Ⅳ（縮尺3/5）

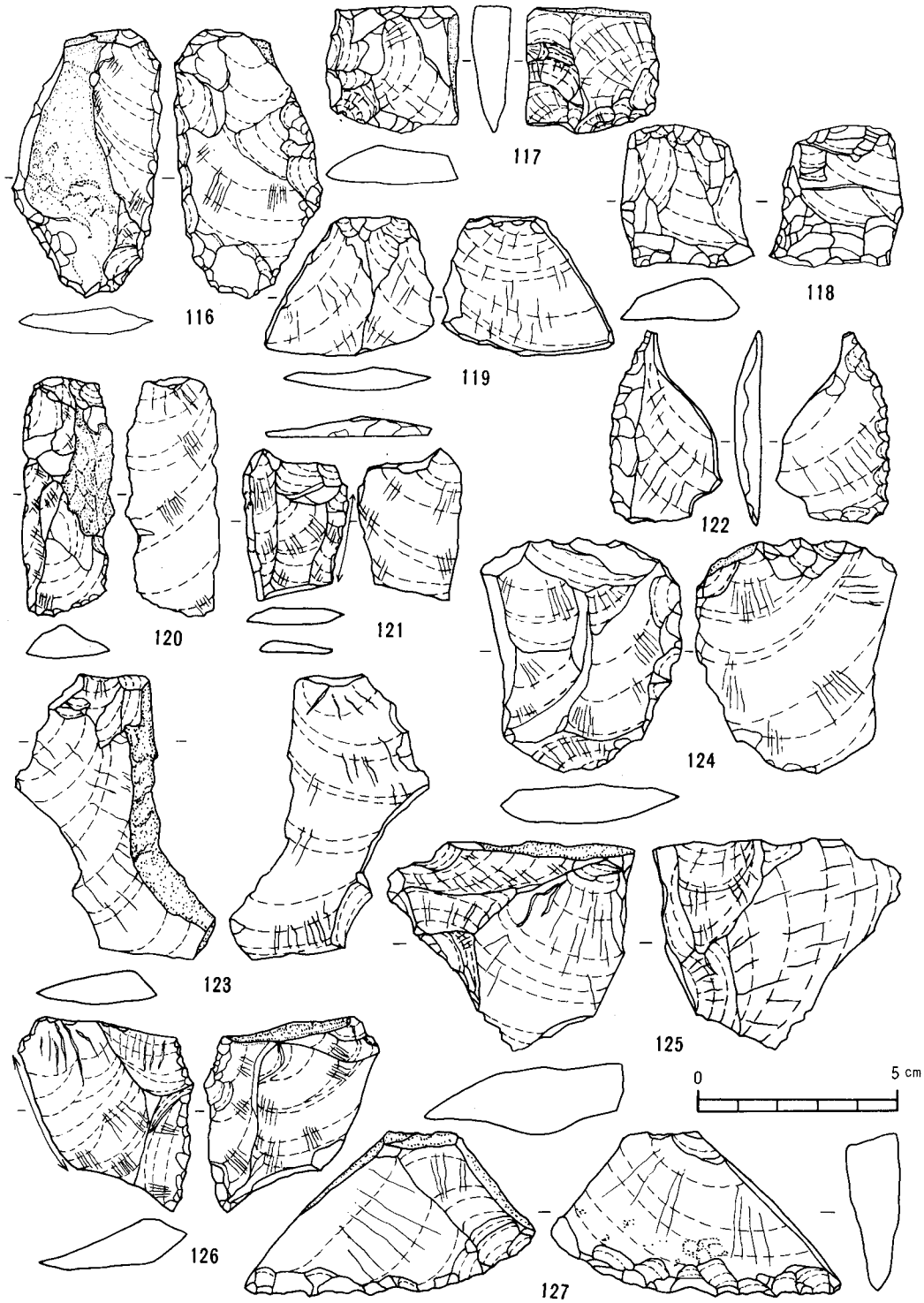


Fig.13　包含層出土石器実測図Ⅴ（縮尺3/5）

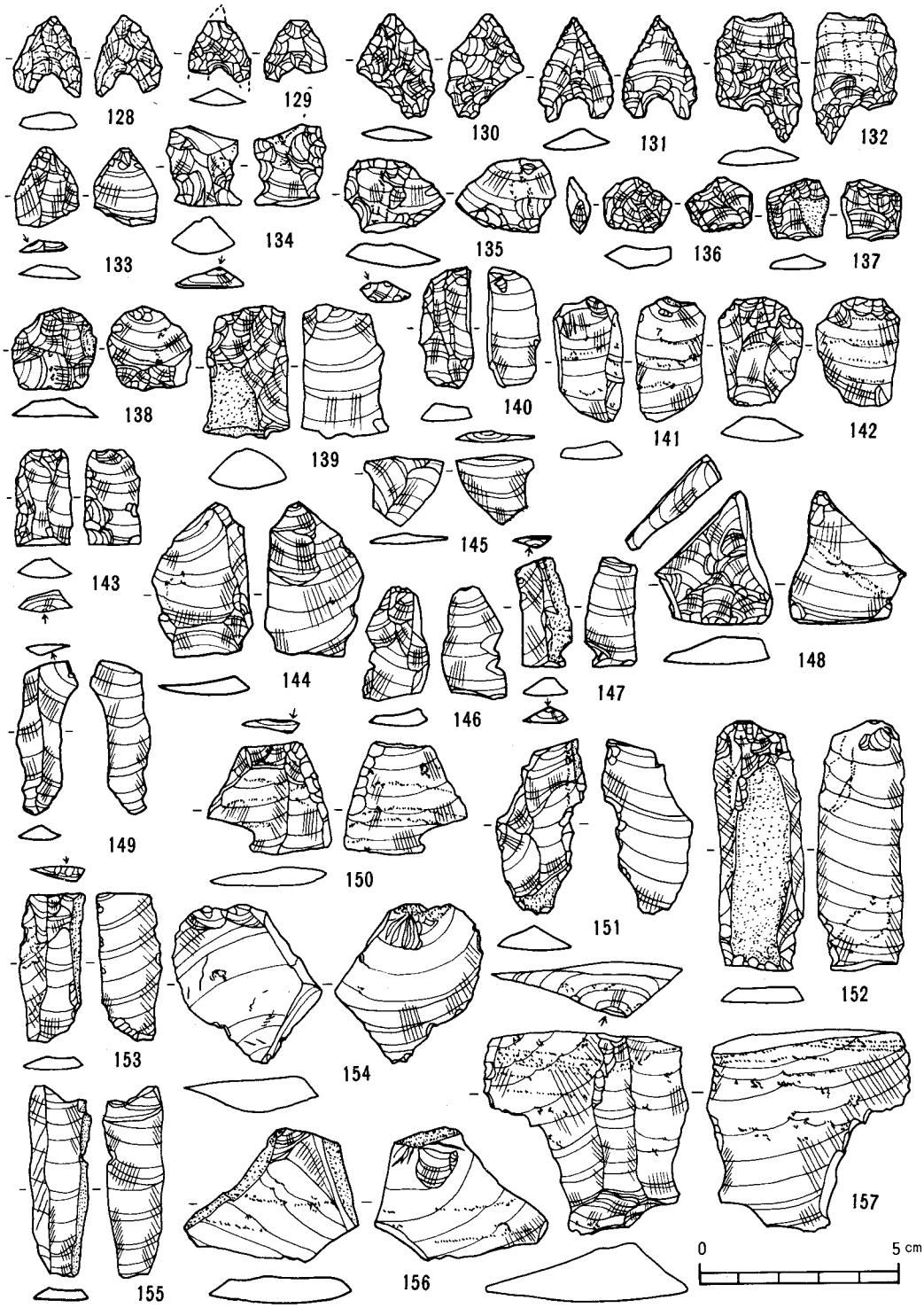


Fig.14　遺構内出土石器実測図Ⅵ（縮尺3/5）

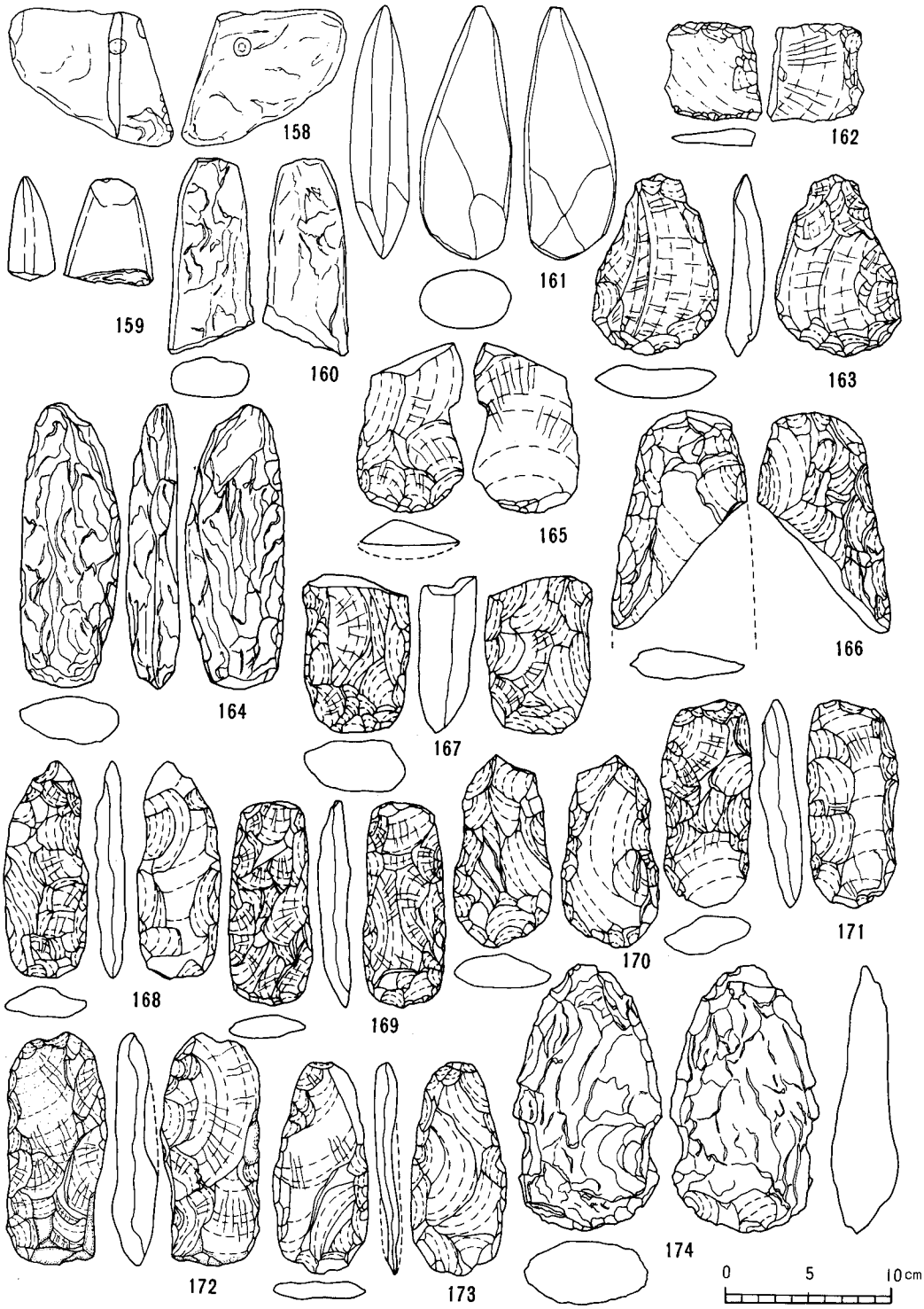


Fig.15　包含層出土石器実測図Ⅶ（縮尺¼）

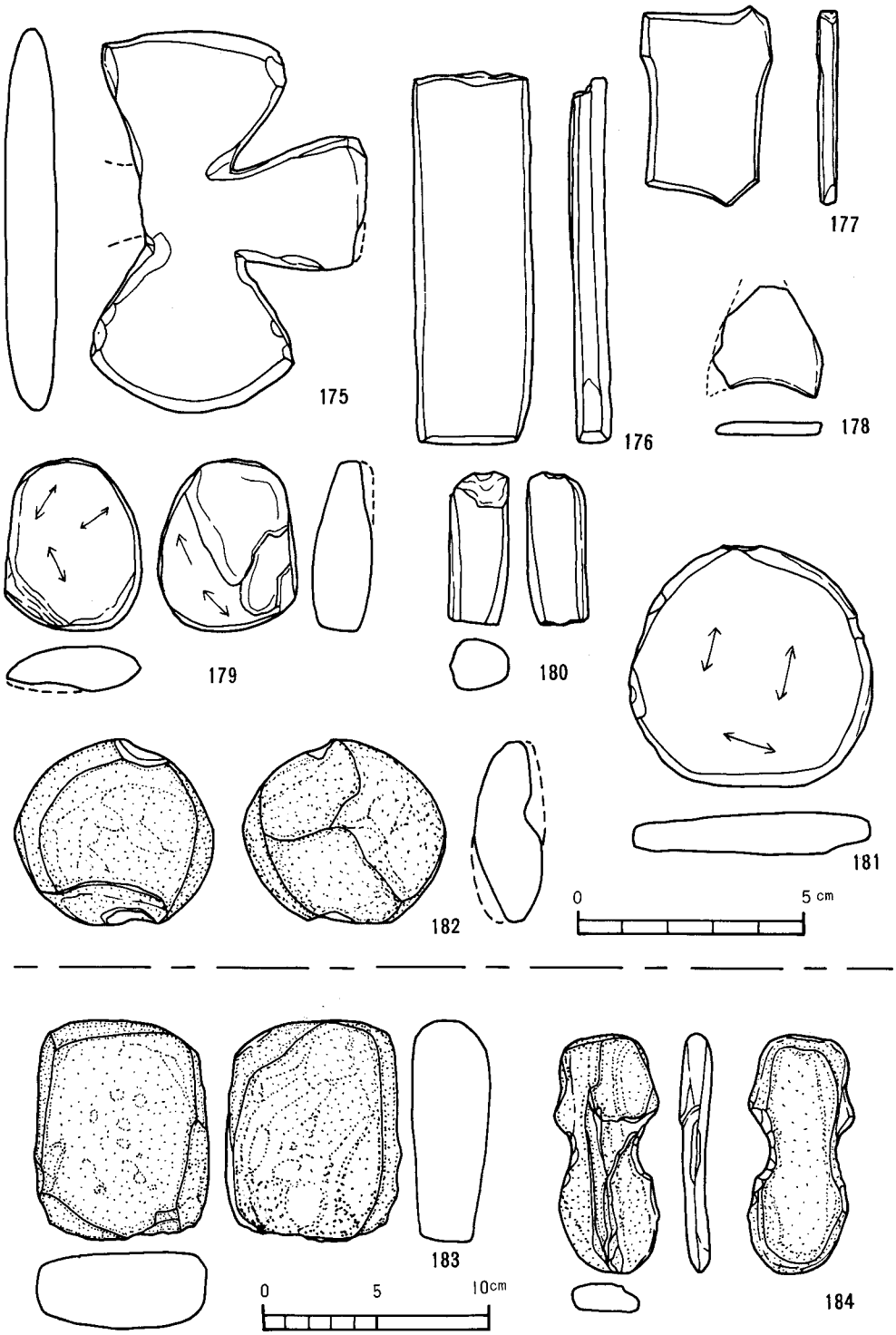


Fig.16　包含層出土石器実測図Ⅷ（縮尺⅔・¼）

Tab. 1　剥片石器計測表

		長さ・巾cm・厚			分類	石質	Fig.	備考
石鏃	1	3.4	1.2	0.4	I	黒曜石	Fig. 9 1	
	2	2.1+α	1.5	0.4	I	黒曜石	Fig. 9 2	
	3	2.6	1.6	0.5	I	サヌカイト	Fig. 9 3	
	4	1.6+α	1.1	0.4	I	黒曜石	Fig. 9 4	
	5	1.9+α	1.5	0.5	II	黒曜石	Fig. 9 5	
	6	1.7	1.4	0.4	II	黒曜石	Fig. 9 6	
	7	2.4	1.5	0.3	II	黒曜石	Fig. 9 7	
	8	2.6+α	2.0	0.4	II	黒曜石	Fig. 9 8	
	9	3.5	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig. 9 9	
	10	3.1+α	2.5	0.5	II	黒曜石	Fig. 9 10	
	11	1.7+α	1.4	0.3	III	黒曜石	Fig. 9 11	
	12	1.9+α	1.9	0.4	III	黒曜石	Fig. 9 12	
	13	1.3+α	1.7	0.4	III	黒曜石	Fig. 9 13	
	14	2.4	1.2	0.3	III	黒曜石	Fig. 9 14	
	15	3.2+α	2.3	0.7	III	黒曜石	Fig. 9 15	
	16	2.1+α	1.5	0.4	II	サヌカイト	Fig.14 128	
	17	2.5+α	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.14 129	
	18	2.6+α	1.8	0.4	II	黒曜石	Fig.14 130	
	19	2.6	1.8	0.5	III	黒曜石	Fig.14 131	
	20	3.2+α	2.0	0.4	II	黒曜石	Fig.14 132	
ドリル	21	2.1+α	0.5	0.3		黒曜石	Fig. 9 16	
	22	1.6	1.7	0.5		黒曜石	Fig. 9 17	
	23	1.6	1.4	0.4		黒曜石	Fig. 9 18	
	24	2.0+α	1.5	0.3		黒曜石	Fig 14 133	
尖頭器	25	2.2	1.6	0.7		黒曜石	Fig.9 19	
	26	2.6	2.0	0.6		サヌカイト	Fig.9 20	
	27	2.6	1.8	0.6		サヌカイト	Fig. 9 21	
	28	4.0	2.2	0.6		黒曜石	Fig. 9 22	
	29	5.1+α	2.2	0.9		サヌカイト	Fig. 9 23	
つまみ形石器	30	2.9	2.2	0.5		黒曜石	Fig. 9 24	
	31	1.7	1.3	0.4		黒曜石	Fig. 9 25	
	32	2.4	1.1	0.4		黒曜石	Fig. 9 26	
	33	1.6	2.1	0.9		黒曜石	Fig. 9 27	

↓

		長さ・巾cm・厚			分類	石質	Fig.	備考
サイド・ブレイド	70	1.6	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.10 59	末端折断
	71	2.6	2.1	0.6	II	黒曜石	Fig.10 60	〃
	72	3.5	1.3	0.4	II	黒曜石	Fig.10 61	
	73	2.7	1.8	0.4	II	黒曜石	Fig.10 62	末端折断
	74	3.0	2.0	0.5	II	黒曜石	Fig.10 63	〃
	75	3.1	1.8	0.6	II	黒曜石	Fig.10 64	両端折断
	76	3.5	1.6	0.3	II	黒曜石	Fig.10 65	先端折断
	77	3.4	2.0	0.5	II	黒曜石	Fig.10 66	両端折断
	78	3.7	1.4	0.4	II	黒曜石	Fig.10 67	〃
	79	3.7	1.9	0.7	II	黒曜石	Fig.10 68	先端折断
	80	3.3	1.4	0.6	II	黒曜石	Fig.10 69	
	81	3.9	1.8	0.8	II	黒曜石	Fig.10 70	先端折断
	82	1.8	1.6	0.5	II	黒曜石	Fig.10 71	〃
	83	2.6	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.10 72	〃
	84	2.7	1.5	0.5	II	黒曜石	Fig.10 73	両端折断
	85	3.2	1.5	0.6	II	黒曜石	Fig.10 74	先端折断
	86	2.0	1.9	0.3	II	黒曜石(姫島産)	Fig.10 75	両端折断
	87	3.5	2.1	0.6	II	黒曜石	Fig.10 76	〃
	88	2.6	2.0	0.3	II	黒曜石	Fig.10 77	〃
	89	2.3	1.5	0.3	II	黒曜石	Fig.10 78	〃
	90	2.6	1.7	0.5	II	黒曜石	Fig.10 79	〃
	91	2.8	1.2	0.5	II	黒曜石	Fig.10 80	〃
	92	3.3	1.9	1.0	II	黒曜石	Fig.14 139	
	93	3.0	1.2	0.5	II	黒曜石	Fig.14 140	
	94	3.1	1.5	0.5	II	黒曜石	Fig.14 141	
	95	2.6	2.0	0.6	II	黒曜石	Fig.14 142	
	96	2.4	1.3	0.5	II	黒曜石	Fig.14 143	末端折断
	97	3.8	2.4	0.5	II	黒曜石	Fig.14 144	
	98	1.7	1.9	0.3	II	黒曜石	Fig.14 145	先端折断
	99	2.9	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.14 146	
	100	2.7	1.2	0.5	II	黒曜石	Fig.14 147	両端折断
刃器	101	5.3	2.2	0.7	I	黒曜石	Fig.11 81	
	102	4.1	1.3	0.4	I	黒曜石	Fig.11 82	

↓

つまみ形石器	34	2.8	1.5	0.5		黒曜石	Fig. 9	28	
	35	2.6	1.7	0.5		黒曜石	Fig. 9	29	
	36	2.0	1.6	0.9		黒曜石	Fig.14	134	
	37	1.8	2.5	0.6		黒曜石	Fig.14	135	
楔形石器	38	1.9	1.7	0.5		黒曜石	Fig. 9	30	
	39	1.7	1.6	0.4		黒曜石	Fig. 9	31	
	40	1.7	1.6	0.4		黒曜石	Fig. 9	32	
	41	1.9	1.8	0.7		黒曜石	Fig. 9	33	
	42	1.8	1.4	0.5		黒曜石	Fig. 9	34	
	43	3.4	1.3	0.7		黒曜石	Fig. 9	35	
	44	2.5	0.9	0.6		黒曜石	Fig. 9	36	
	45	2.2	1.5	0.7		黒曜石	Fig. 9	37	
	46	2.1	1.2	0.5		黒曜石	Fig. 9	38	
	47	2.0	1.2	0.7		黒曜石	Fig. 9	39	
	48	2.4	1.7	0.6		黒曜石	Fig. 9	40	
	49	2.6	2.0	0.9		黒曜石	Fig. 9	41	
	50	1.9	1.0	0.6		黒曜石	Fig. 9	42	
	51	2.3	1.4	0.4		黒曜石	Fig. 9	43	
	52	1.7	0.8	0.5		黒曜石	Fig. 9	44	
	53	2.4	2.0	0.6		黒曜石	Fig. 9	45	
	54	1.4	1.6	0.5		黒曜石	Fig.14	136	
	55	1.5	1.5	0.4		黒曜石	Fig.14	137	
	56	2.0	2.0	0.5		黒曜石	Fig.14	138	
彫器	57	2.4	1.6	0.7		黒曜石	Fig.10	46	
	58	2.4	1.7	0.8		黒曜石	Fig.10	47	
	59	2.7	1.0	0.6		黒曜石	Fig.10	48	
サイド・ブレイド	60	3.6	2.0	0.6	I	黒曜石	Fig.10	49	
	61	2.7	2.4	0.5	I	黒曜石	Fig.10	50	
	62	2.0	1.8	0.4	I	黒曜石	Fig.10	51	
	63	2.7	1.5	0.5	I	黒曜石	Fig.10	52	
	64	2.3	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.10	53	
	65	3.0	1.4	0.4	II	黒曜石	Fig.10	54	末端折断
	66	2.6	1.8	0.3	II	黒曜石	Fig.10	55	〃
	67	2.9	2.0	0.5	II	黒曜石	Fig.10	56	〃
	68	2.3	1.7	0.5	II	黒曜石	Fig.10	57	〃
	69	2.6	2.1	0.5	II	黒曜石	Fig.10	58	

刃器	103	5.0	1.4	0.4	I	黒曜石	Fig.11	83	
	104	4.5	1.5	0.5	II	黒曜石	Fig.11	84	
	105	5.0	2.2	0.4	II	黒曜石	Fig.11	85	
	106	5.2	2.2	0.6	II	黒曜石	Fig.11	86	
	107	5.0	2.0	0.6	II	黒曜石	Fig.11	87	
	108	4.7	2.0	0.6	II	黒曜石	Fig.11	88	
	109	6.0	2.5	0.5	II	黒曜石	Fig.11	89	
	110	5.0	1.8	0.6	II	黒曜石	Fig.11	90	
	111	4.4	2.1	0.7	II	黒曜石	Fig.11	91	
	112	8.3	2.1	0.5	II	黒曜石	Fig.11	92	
	113	6.3	1.8	0.5	II	黒曜石	Fig.11	93	
	114	5.3	1.9	0.8	II	黒曜石	Fig.11	94	
	115	7.3	1.6	0.5	II	黒曜石	Fig.11	95	
	116	4.2	1.5	0.6	II	黒曜石	Fig.11	96	
	117	4.0	1.3	0.3	II	黒曜石	Fig.11	97	
	118	3.9	2.0	0.5	II	黒曜石	Fig.11	98	
	119	5.0	1.9	0.5	II	黒曜石	Fig.11	99	
	120	4.7	2.7	0.6	II	黒曜石	Fig.11	100	
	121	9.9	1.8	1.0	II	黒曜石	Fig.11	101	
	122	3.8	1.0	0.4	II	黒曜石	Fig.14	149	先端折断
	123	2.7	3.0	0.5	II	黒曜石	Fig.14	150	〃
	124	4.4	1.9	0.4	II	黒曜石	Fig.14	151	〃
	125	6.2	2.1	0.4	II	黒曜石	Fig.14	152	
	126	3.3	1.5	0.4	II	黒曜石	Fig.14	153	先端折断
	127	4.8	1.4	0.3	II	黒曜石	Fig.14	155	〃
剥片	128	4.4	2.3	0.7		黒曜石	Fig.12	102	
	129	3.7	1.9	0.3		黒曜石	Fig.12	103	
	130	3.5	2.2	0.3		黒曜石	Fig.12	104	
	131	4.4	2.4	0.5		黒曜石	Fig.12	105	
	132	3.8	2.0	0.8		黒曜石	Fig.12	106	
	133	2.0	3.5	0.6		黒曜石	Fig.12	107	
	134	2.8	3.4	0.9		黒曜石	Fig.12	108	
	135	4.0	3.5	0.8		黒曜石	Fig.14	154	
	136	3.3	4.3	0.6		黒曜石	Fig.14	156	
	137	5.0	5.0	1.4		黒曜石	Fig.14	157	

Ⅳ．まとめ

以上報告した事実に基き、本遺跡の問題点を整理してまとめとしたい。

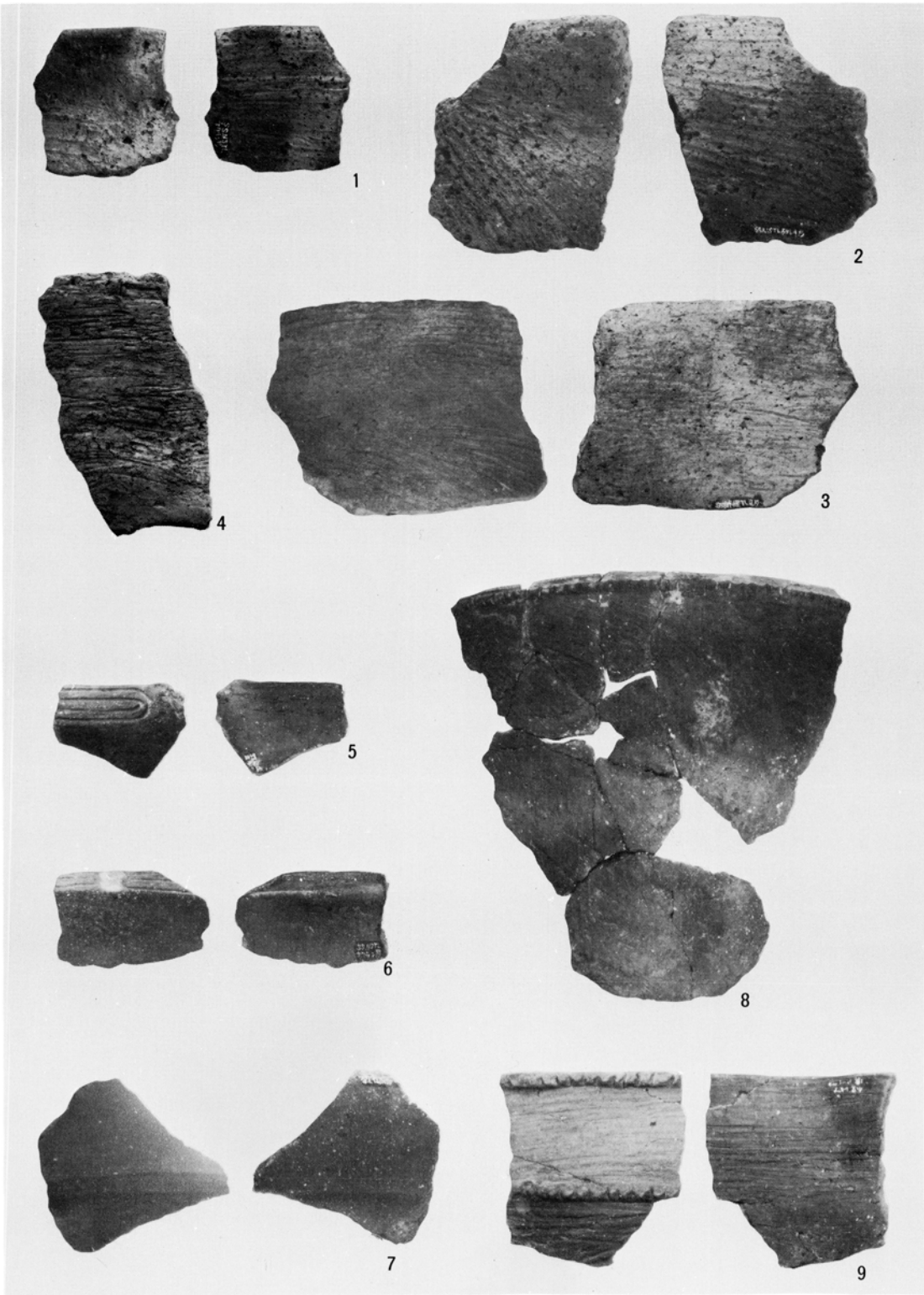
本遺跡で検出した遺構は竪穴住居址１軒、溝３条、埋甕１、ピット２、柱穴状ピット58などである。これらの内、３号溝としたものは南側の段落ち部分に疑問が残り、もっと大きく広がる凹地の可能性が強い。包含層や主な遺構から出土した土器の分類別一覧はTab.2に示すとおりである。縄文土器では、鉢形土器１－ａ～ｂ類、２－ａ～ｂ類、浅鉢形土器１－ａ～ｂ類、２類が三万田式、鉢形土器２－c類、浅鉢形土器１－c類、３類が御領式に近い形態・手法を持つ。又、1号ピット、3号溝埋土、竪穴住居址埋土から夜臼式土器が出土している。弥生土器は１号溝から板付Ⅱ式、竪穴住居址から板付Ⅰ式、板付Ⅱ式の両型式の土器が出土している。したがって本遺跡の営まれた時期は、縄文後期後葉～縄文晩期、縄文晩期後葉～弥生前期と考えられる。各遺構の時期については、１号ピットが夜臼式、１号溝が板付Ⅱ式かそれ以降、２号溝が夜臼式と三万田式の中間期、３号溝は２号溝より遡る三万田式に近い時期、竪穴住居址は１号溝とほぼ同時期で弥生前期末以降の所産と考えられる。

出土した石器は、発掘面積に比して器種、数量において豊富であるが、土器型式と石器の組成の変化を細かく分析しうる調査ができなかった。しかしながら、扁平打製石斧の特徴、楔形石器が顕著に認められるという点などは、本遺跡が沖積地に立地する条件より、縄文後期後葉には、本遺跡周辺に点在する縄文後晩期貝塚などの慣海性遺跡とは生活基盤を異にするグループの析出があったと考えられる。なお、本遺跡の至近の一帯には縄文晩期～弥生前期の遺跡が発見されつつあり、今後の調査によって、より具体的にこの地域の縄文後晩期の様相が明らかにされるだろう。

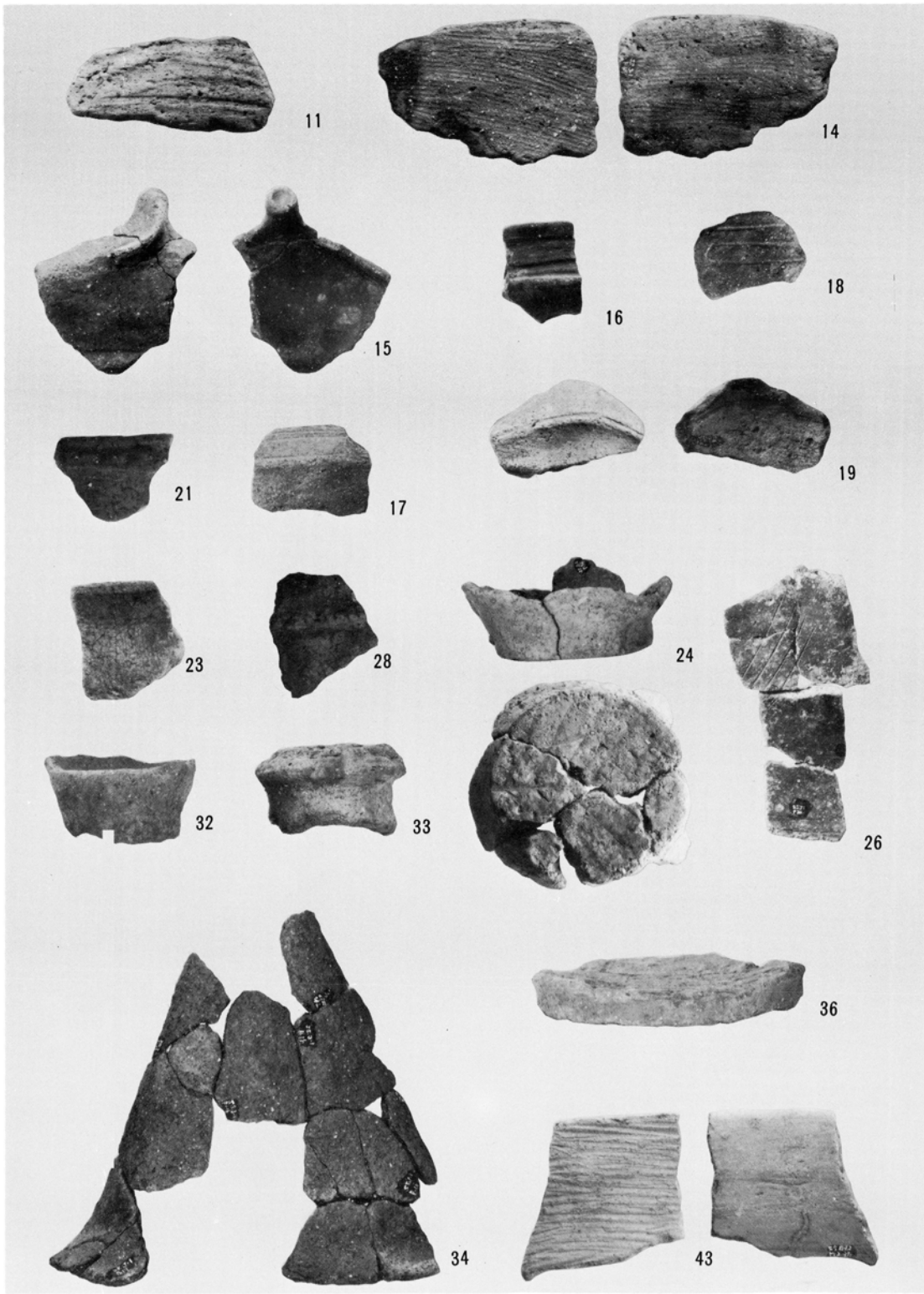
		縄文土器																			弥生土器					
		鉢形土器						浅鉢形土器					深鉢形土器						甕	壺	甕・壺・高杯			甕・壺・高杯		
		1		2			3	1			2	3	1		2	3		4			板付Ⅰ式			板付Ⅱ式		
		a	b	a	b	c		a	b	c			a	b		a	b									
1号ピット																○			8 9 10							
包含層	Ⅲa層	○						5 6	○		○		○	3												
	Ⅳ層																									
	Ⅴ層										7				2											
1号溝													○		○									36		
2号溝		55 58 56 59 57				53 54	37			61 62	63 68	60	38 39 41		47	40 44		42 43								
3号溝			65	67				66						○	64			70	○	○						
住居址		18		19	15			17		16			45	12 13 46	11 44	4	14		21	20		27	33 34	22 28 23 29 24 30	25 26	

Tab. 2　各遺構出土土器分類別一覧表（数字は土器番号）

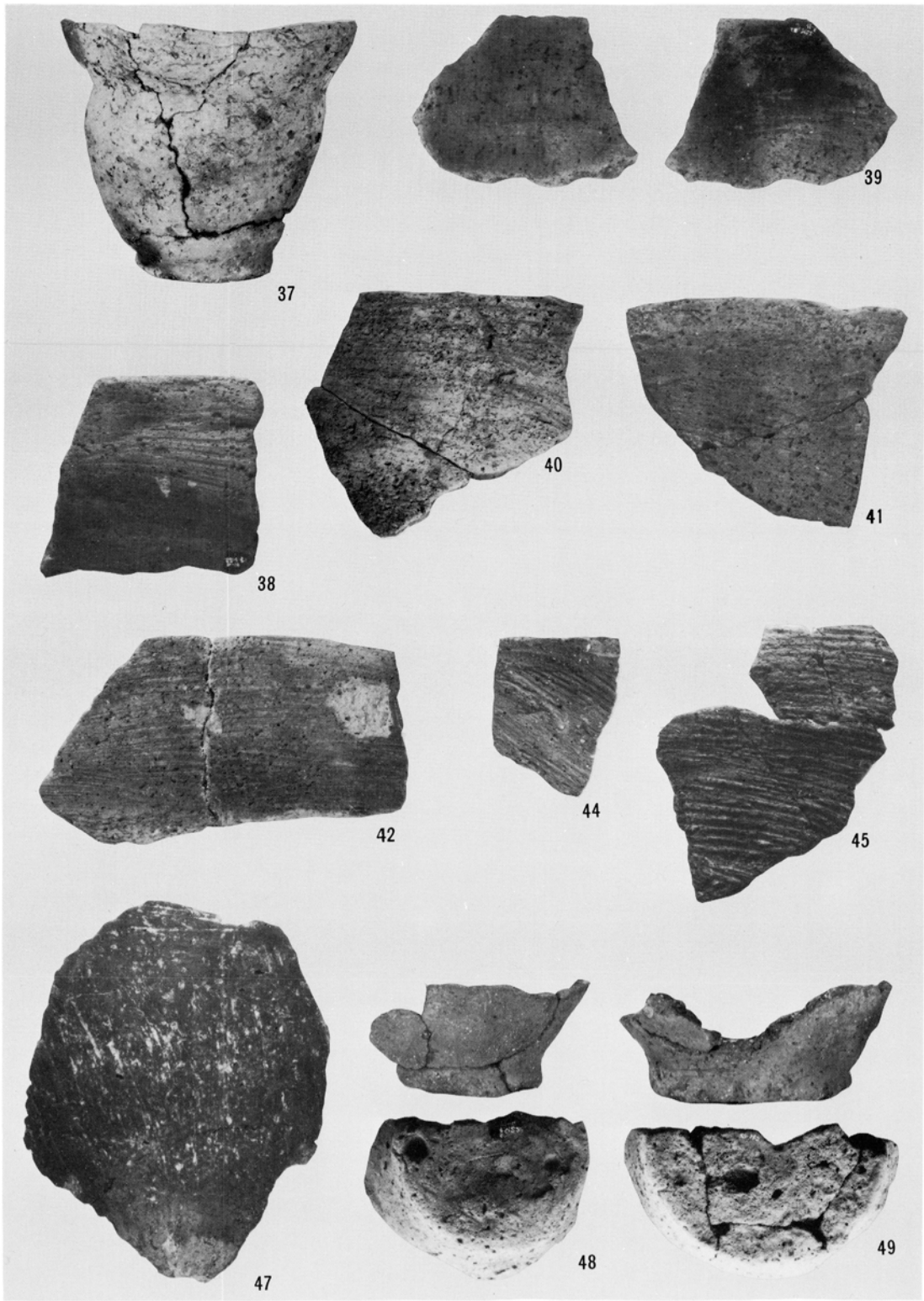
PLATES



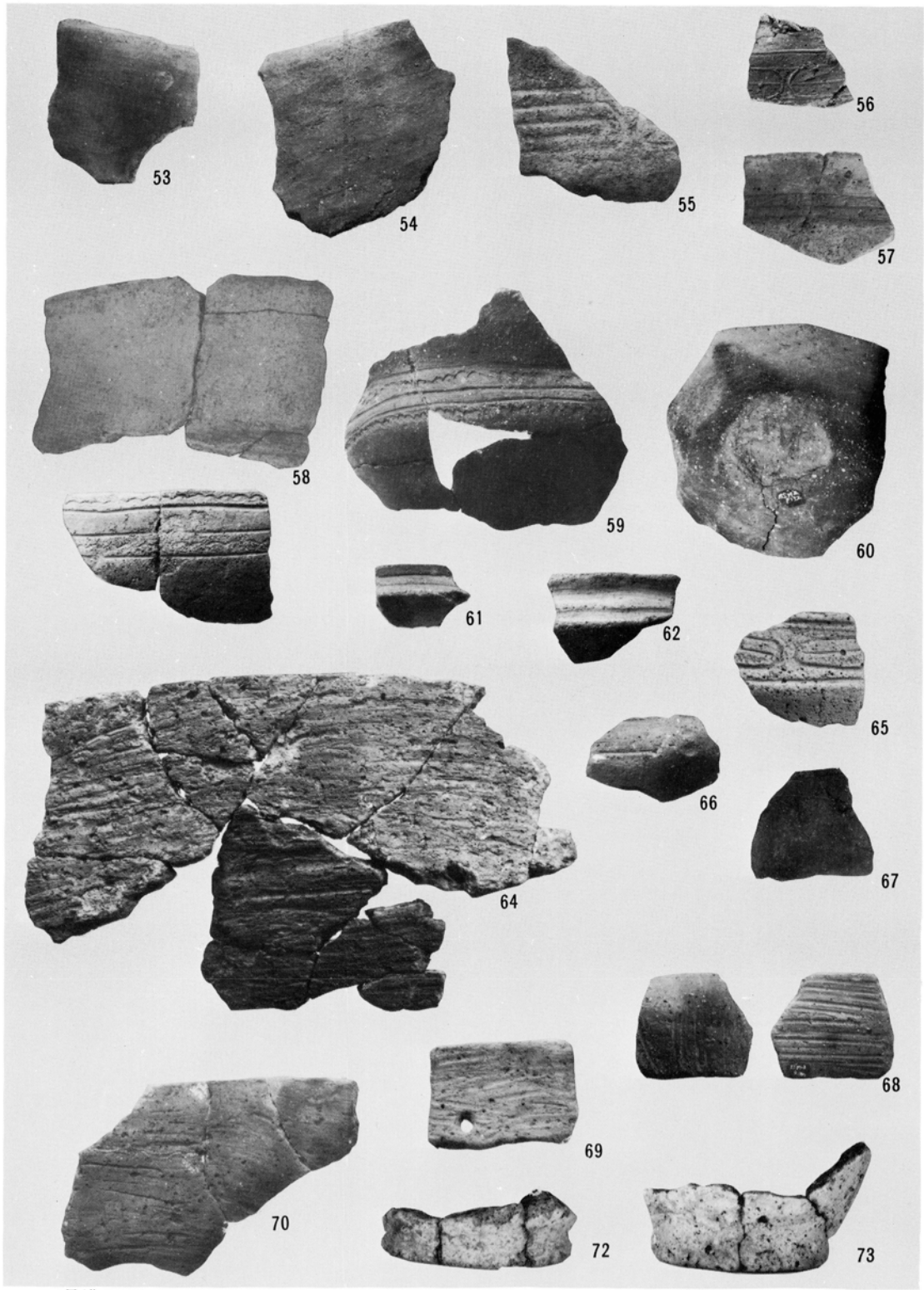
包含層、ピット出土土器



住居址、1号溝、2号溝出土土器



2号溝出土土器



2号溝、3号溝出土土器

石鏃，つまみ形石器，サイド・ブレイド（縮尺3/5）

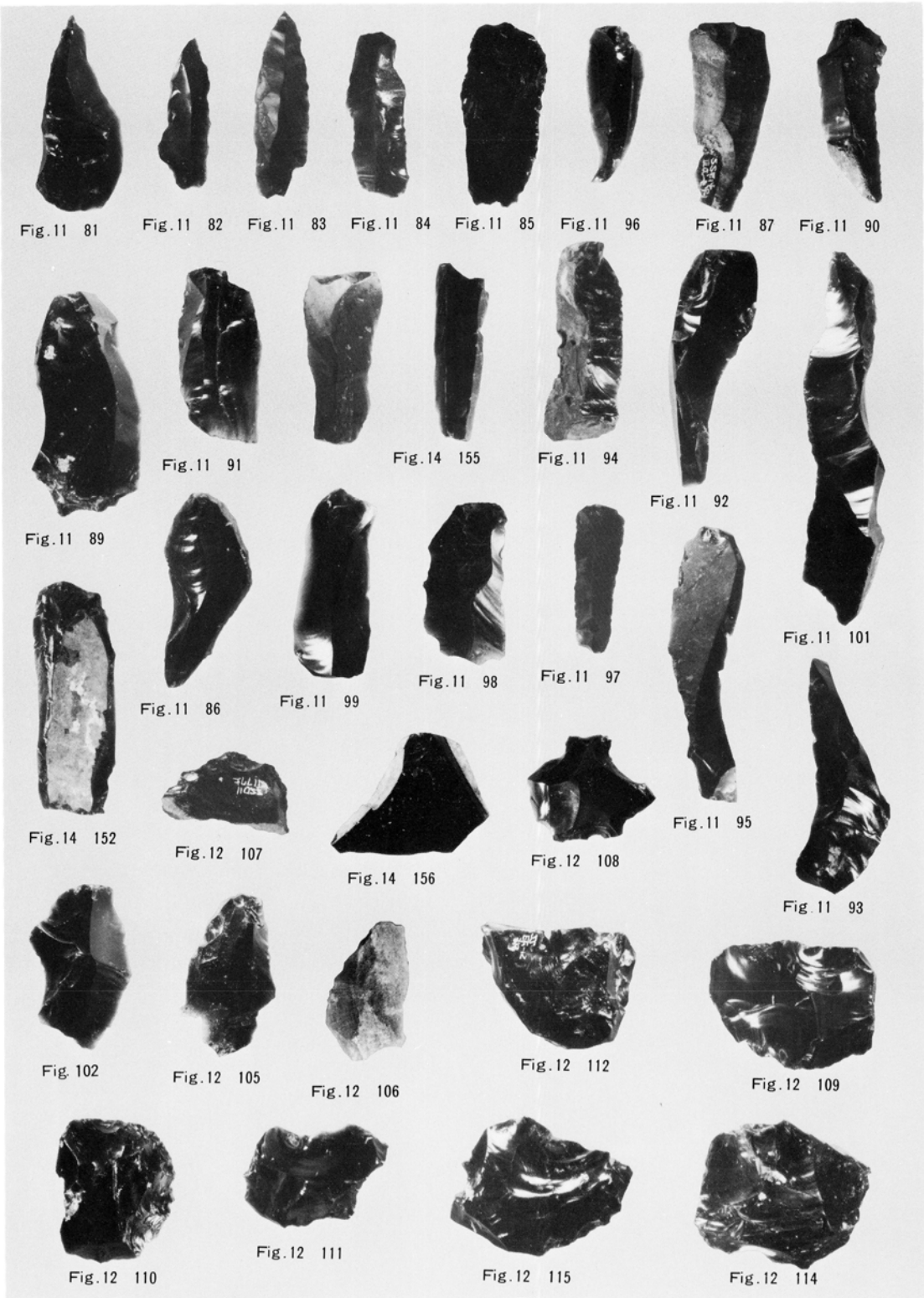
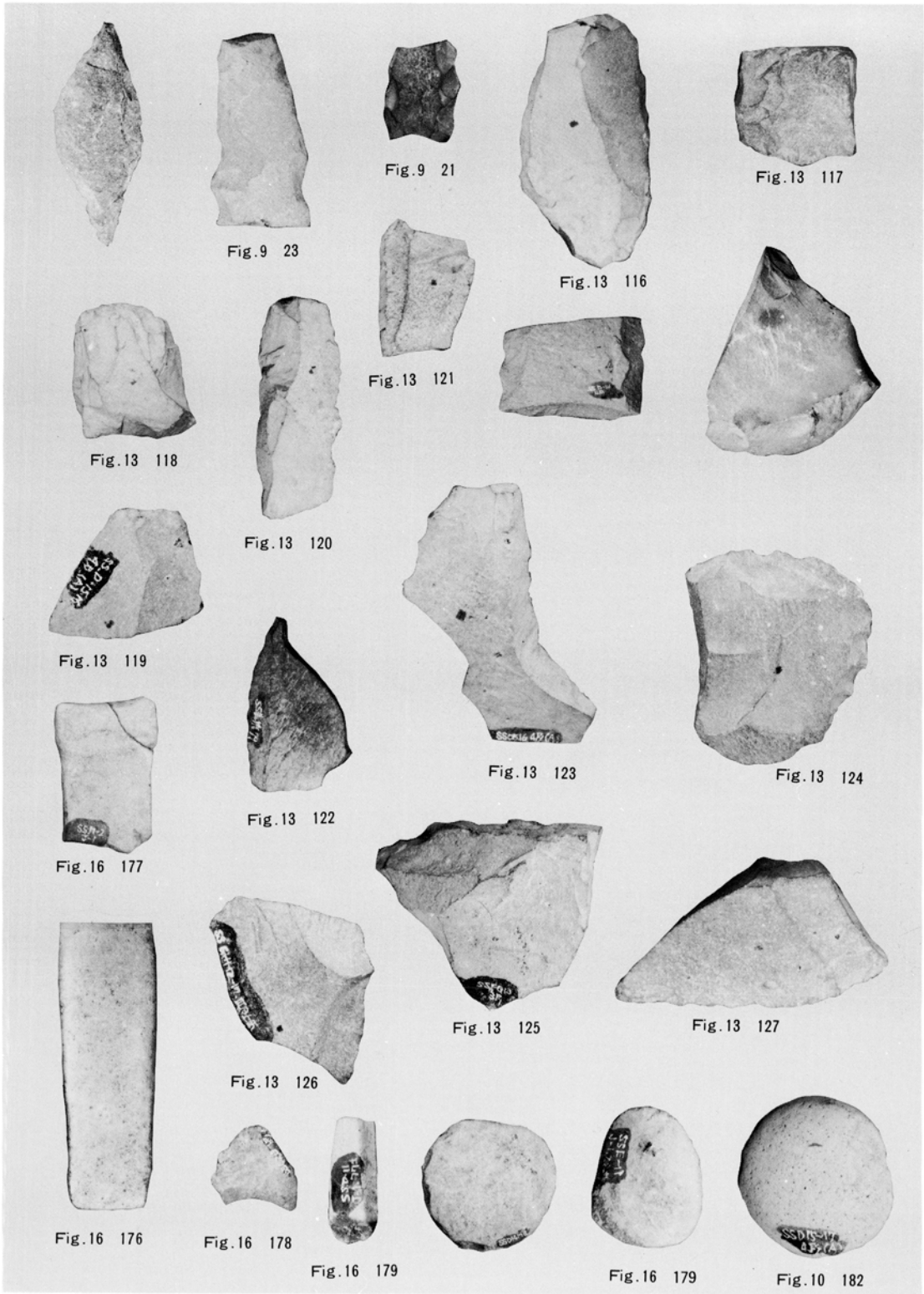
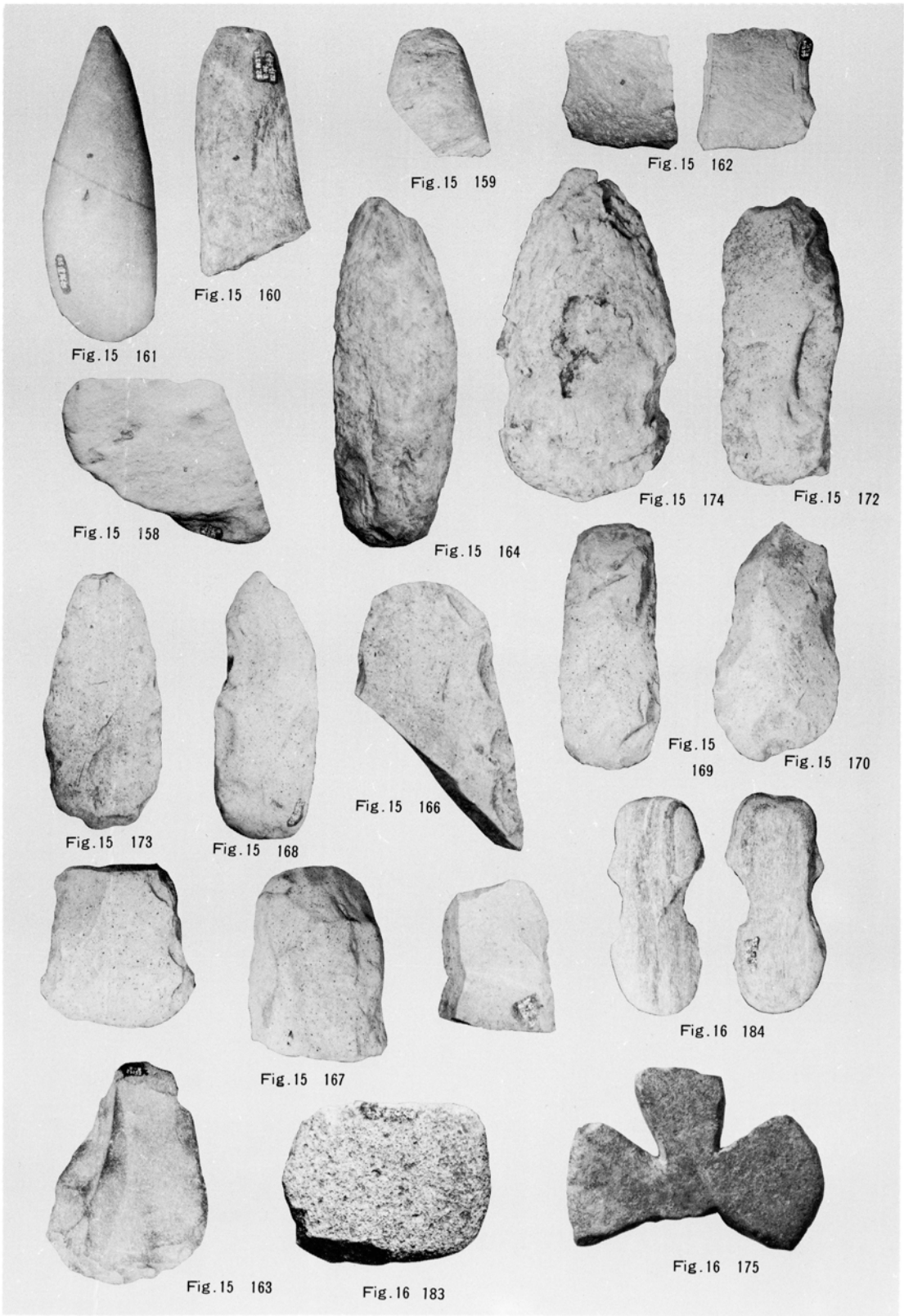


Fig.11 81
Fig.11 82
Fig.11 83
Fig.11 84
Fig.11 85
Fig.11 96
Fig.11 87
Fig.11 90
Fig.11 89
Fig.11 91
Fig.14 155
Fig.11 94
Fig.11 92
Fig.11 101
Fig.14 152
Fig.11 86
Fig.11 99
Fig.11 98
Fig.11 97
Fig.11 95
Fig.12 107
Fig.14 156
Fig.12 108
Fig.11 93
Fig.102
Fig.12 105
Fig.12 106
Fig.12 112
Fig.12 109
Fig.12 110
Fig.12 111
Fig.12 115
Fig.12 114

刃器，石核（縮尺3/5）



剥片石器（サヌカイト），石錘，他（縮尺2/5）



磨製石斧，打製石斧，他（縮尺1/3）

福 岡 市 西 区

千 里 シ ビ ナ 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第88集

1982年 3 月31日

発 行　福 岡 市 教 育 委 員 会
福岡市中央区天神1－8－1

印 刷　(有) 松 古 堂 印 刷